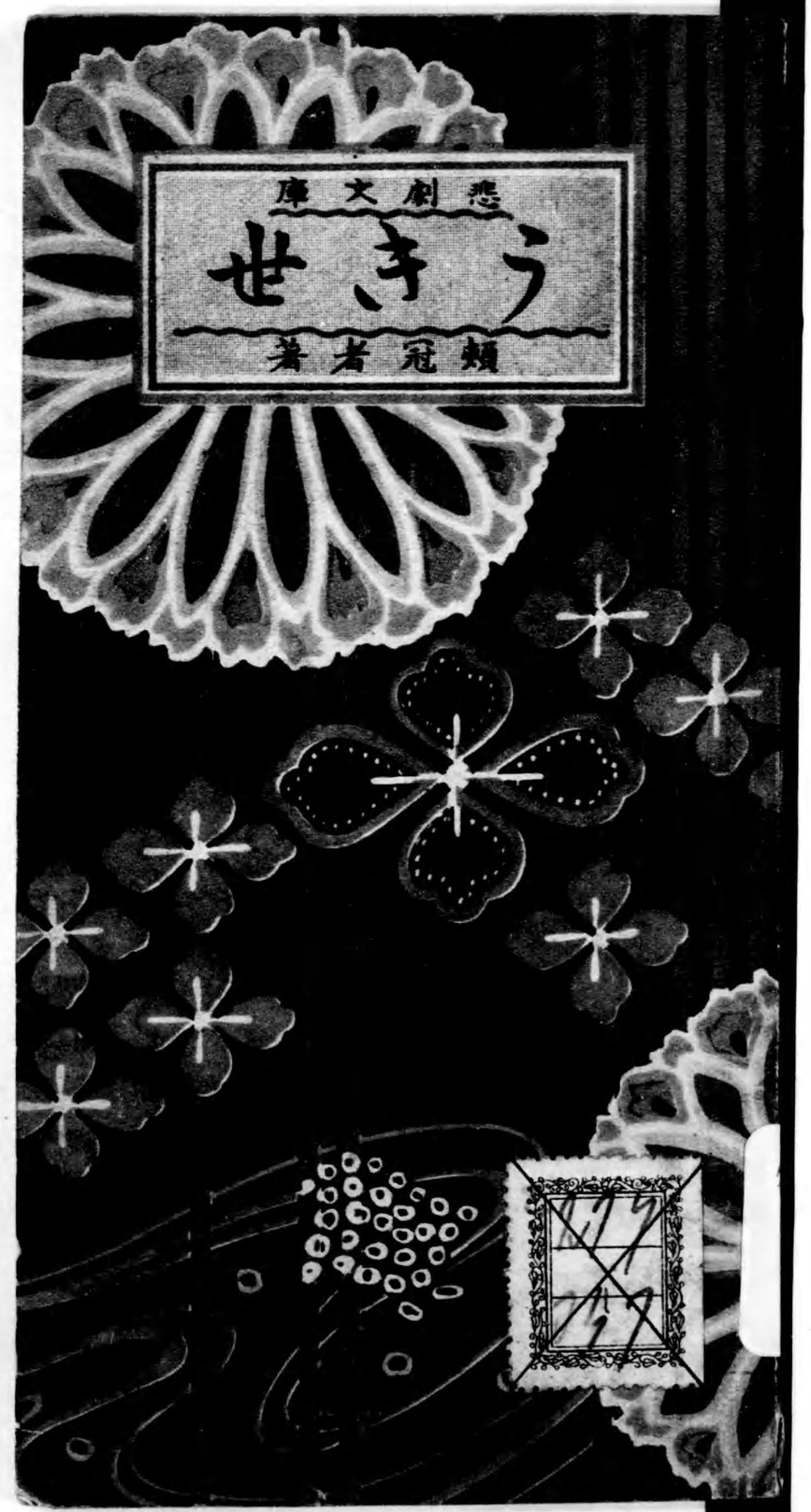

始

特100
333

LIFE IS A LITTLE GLEAM OF TIME
BETWEEN TWO ETERNITIES
—*CARLYLE*—

世きう

人生は過去と未來
の二つの無窮の間
に於けるタイムの
僅かの閃き也

KYUKOKAKU
Kyobashi Tokyo

大正
7. 1. 25
内交

御あいさつ

人間は誰でも、慰安といふものが最も必要であるが、その慰安が餘り多きに過ぎ、或は永きに亘れば、却つて惰落に陷るのである。で同じ小說でも、徒らに事件を曲折し、或は字句を引き延して、讀者の大切なる時間を偷むといふことは、夙に生等の憂ふる所である、如何に慘澹たる十年の告白も、十幕二十幕に仕組むべき悲劇も、僅か二百頁の小册子で充分盡されるのである。本の大小、字句の多少が、直ちに小說の興味ではない、價値ではない。十七字の詩克く茶人の頤を解かせ、三十一文字の歌克く悶々の戀情を盡す。卽ち二百頁の小册子、亦克く波瀾重疊の悲劇を舒するに充分なのである。……と理屈を言へば、聊か手前味噌の餘ひはあるが、先づ〳〵一編をお試しあつて、續々御愛讀あらんことを、と……爾云

發行者白す

うき世

たしにりかばんら取を手の野吉は藤後、と」、かたしてんさ野吉が女貴「
。たれ仆に終ていめ踉蹌と々々ロヨ 、聲ひ顫は野吉、と」、……てしまめ初 、は「

悲劇文庫

うき世

三宅頬冠者著

（一）

自家の定紋を金蒔繪にした曲録に靠れて、長やかな白髯を撫しながら、部厚い緞子の羽座敷團に、傲岸な安座を埋めて居る骨格逞しい大兵の老紳士――それは姉川家の當主義興である。

「では何か、銀行の方では私の財産を悉く擔保に入れゝば、右から左に二十萬

貸せると言ふのぢやな。」

と、グルリと廣い屋敷を見渡すやうに、十二疊の居間を見廻して、最後の視線を對話者の吾妻久四郎に向けながら、念を押すやうに斯う言つた。

「はい、左樣でございます、それさい出來ますれば、今日が今日でも間に合はせると言ふ事でございました。はい。」

久四郎は脊中を丸くして臂を膝に衝き、宛行はれた火鉢で掌を炙りながら、義興とは四五尺も下座つた所から愼ましさうに言つた。頭は綺麗に禿げて居るが、やつと耳順といふ年配、供をしろと言はれゝば、新橋でも柳橋でも、早速承はつて御先途申上げやうと言ふらしい、娑婆氣は充分窺はれて居る、それも

其筈、この十年ばかりと言ふものは、毎日のやうに姉川家へ出入りして、兜町の景氣を物語り、ソレ東鐵だの日本石油だのと、大部油を差して姉川家を左前にさせた野心家、瀧山伴兵衛（義興の養父の弟）なぞは、出入りを差し留めろと義興に猛烈な忠告を幾度もしたが、義興とても野心滿々の折柄ではあり、性來が一酷で、他人を容れる事が大嫌ひな質だから、何日も空吹く風と聞き流し久四郎を手先に使つて種々の方面へ手を出した、そして、一つ〳〵失敗を重ねて今日に至つたのである。

「善哉、では早速書類を作つてくれ、二十萬借入れて、乘るか反るか行つて見やう。」

「はい、承知いたしました……今度は御前様、失敗するやうな事は充々ございません、何しろ立派な技士が踏査して見て、尾去澤や足尾にも増した鑛脈だと言ふ事ですからねへ、今度こそは大儲けをおさせ申します。」

久四郎は脊中を伸して、力強く言つた。

「ナニ、儲よりも、私は事業に趣味を持つてゐるんだ。」と義興は緩然として、

「隠れた地中の財寶を世に照介するといふことは有益な事業だ、愉快な事業だ亦一面から考へて見ても、堀るといふことが既に愉快な事なんぢや。」

「左様でございますねへ、へゝゝゝへ、」

久四郎は妙な笑ひ方をした。

然し、義興は眞面目に、私は好く新聞で「ヤレ何所某所で石器を發堀したとか、或は埴輪を發堀したとか、木伊乃だとか刀劍だとか……といふのを見るが、何とも言へん愉快な感じがするもんぢや、假令それが無價値な物でも、何となく趣味がある、愉快ぢや。」

と、義興は憧憬するやうに言つた。

「全くでございます。」と、久四郎も力強く首肯いて「私共でも愉快に感じます慾徳のない……氣色の好いものでございますねへ。」

「うむ、鑛山事業が私等には適してゐるのかも知れんよ、早く探堀に取り掛らうぢやないか。」

「宜しうございます、では直ぐ書類を調製しまして……。」と久四郎は善は急げと、立ち支度の煙草入を腰に差した。

「臺帳を好く調べて、財産を全部書入れても可い。」

「はい。」

「二十萬あれば可いだらうねへ、豫算は確かね？」

「えゝと……大丈夫でございます、立派な製錬所を建てゝ、新式の機械を買ひ込むとしても、二十萬あれば充分だと思ひます、足尾へ行って充分研究した上で豫算を立てたのでございますから……」

と久四郎は亦座に落着いてゐた。

「然うか、では違算はないねへ。」と、義興は我と我身に呟いて、直ぐ思ひ出したやうに「ウム、臺帳は金庫の中にあるから、お前出して書き入れて呉れ。」と手文庫の中から鍵を投げ出した。

「畏まりました。」と、久四郎はそれを拾ひ取ると、一寸會釋して次ぎへ立ち去った。

南を受けた椽頰の硝子戸の腰に、まだ和柔かい春の日脚が、四五寸歩みを止めてゐた、同じ葉のない櫻の老木も、何所やらに生氣が出來て、更に動ずる氣色もなく、澄し込んで息づいてゐる、常盤木は色を増し、木下や庭石に屁張り付いた苔も、一際青く繃蔓つて見へた。

「嗟、私も、最一花目覺しく咲かせたいものぢや。」と、義興は白髯を撫しながら、眤と庭を瞶めて呟くのであつた。

（二）

姉川家の全財産――二十萬圓を投じて、岡山縣下の一ノ宮で、銅鑛を採堀する事にして、吾妻久四郎は姉川義興の命令に依り、凡ての設備をする爲めに、最う餘程以前から同地へ出張してゐるのである。

新式の機械は幾臺か据付けられ、製錬所も大略落成して、運輸は軌道で吉井川まで出し、計畫通りに川の便を利用するまでに進捗した、此上は目的通りに

採堀して、坑脈さへ豫想通りなら、大成功は握り締められるのである。

毎日、取りかへ引き替へ、電報なり手紙なりで報じられる義興は、鑛區の地圖を按じて喜んだ、然し自から計畫して、自から實地の權力を握つてゐる吾妻久四郎は得意滿面、津山の壽館といふ土地一等の料理屋兼旅館に宿り込んで多くの事務員を頤で使ひ、一週間に一度位二人輓きの俥を一ノ宮へ驅るばかりで、常に酒と女で費を盡してゐる、何しろ二十萬圓といふ大金を攫んでゐるのだから、久四郎に取つては黄銅鑛を堀るに先だつて、弗箱を堀り當てたやうなものである。

禿頭の光澤もテカ〳〵して、肉附も以前とは好くなつた、義興の前で頭をペ

コ〳〵下げてゐた久四郎を覺へてゐるものが今の彼を見たら、或は見違へるかも知れない位である。

始めの內は宿へ藝者を呼んで、手當り次第に折花攀柳の曲藝を演じてヤニ下つてゐたが、放蕩は段々切じて、背景の變つた料亭へ出馬し、二階町邊でも盛に色を漁つて、東大盡と土地の花柳便りに評判されるやうになつた、それが亦興味を添へて、一層大盡風を吹き立てる、時には岡山までも出陣して、中富でござれ旭樓でござれ、東大盡を知らぬ藝者や料理屋は、中以下のデモ付きばかりであつた。

久四郎は遊興對手の事務員船橋良平を連れて、此二三日といふものは、岡山

の三吉野へ流連してゐた、中劵の愛之助といふまだ乳臭い半玉上りの女が、馬鹿に御意に叶つたと見へて、片時も側を離さず溺れてゐる、朝から晩まで晩から夜更けまで、酒に醺つて正體はない有樣、其鼻の延びやうと言つたら、喜ぶ筈の愛之助が、ツク〳〵嫌やになつて太息を吐く位。

「旦那、少し散歩でもしませうよ、高砂座へでも連れて行て下アはへ。」と、遣り切れなくなつて强請つた。

「芝居か、好からう、一體誰が來てゐるんぢや。」

「雁次郎さんに福助さん、好えさうですよ、ねへ姐さん。」と、愛之助は外の姉藝者に同意を求めた。

「さう、好えさうだわ、旦那行きまひやうよ、なア……なア旦那。」

「あゝ行かう。」

「行く〳〵言ふばかりで……本統に連れて行て下アはるの。」

斯う言つて、八方から責めたてられ、漸やく俥を呼ばせて芝居見物に出掛けたのは昨夜であつた。愛之助は、今夜も何所かへ連れ出して、自分が氣晴をしやうと考へてゐた。

「旦那、今夜は何所へも連れて行つて下アはらんの？」

「何故ぢや。」と、久四郎は年甲斐もなく目尻を下げて、酒臭い息を吹きながら愛之助の顏を厭きもせず瞶めるのである。

「ホ、、ホ貴郎が餘り澤山お酒をお飲みんさるから、若し身體に障りやへんかと思ふて、散歩をしまひやうと云ふんですよ。」

「散歩？　好し〳〵、お前ならこそ、可く言つてくれた。」

「ホ、、ホ、本統ですよ。」

「本統とも〳〵。さあ行う。」と立つ、

「まあ、如何して今日はそんなに從順にお出んさるの？」と、一座の藝者や女中が惘れるやうに言つた。

久四郎はそれには答へず「オイ愛之助、手を曳いてくれ、手を——あれ此口で言ふたのか……とな。」

「ホ、、ホ」

今までの一座の騒ぎが、幾間かを通り越して、玄關先きへガヤ〳〵搖ぎ出ると、其所で主婦と立話をしてゐた洋服の一紳士が、

「オ、吾妻さん。」と、慌てた内にも叮嚀に一禮して、ツカ〳〵と近付いた、此紳士は鑛山事務所の事務員で、たつた今主婦に取次ぎを頼んでゐた所なのである。

「何ぢや、又用か。」と、久四郎に澁面きつて、不興氣に言つた。

「た、大變が出來ました。今製錬所が燒けてゐる最中、取るものも取り敢へずお知らせに參りました。」事務員は呼吸を逼迫ませて言つた。

「エ、ッ、製錬所が……や、燒けた。」と、久四郎は酒の醉も一時に散り、身體を顫はせて言ふべき言葉も頓に出なかつた。

藝者や女中は片唾を嚥んで、眤と顏を見合せてゐる。

（三）

花は束の間、一度綻んで既に散つた、春は闌けたのである。櫻も柔らかい若葉を着け、木といふ木、草といふ草は、日一日と綠濃くなつた。

姉川義興も二度ばかり鑛山へ出掛けて、實地に技士の說明を聞いたので、此上は豫想を實現するばかり、大成は早や掌中に据られたも同樣で、胸中には充

分の誇が輝やいてゐる。

米流の袷に、鼠縮緬の兵兒帶をグル〳〵卷にし、庭下駄をつッかけて、庭木の下に立つた、空は可く晴れて紺碧である。

「ア、、可い陽氣だ。」義興は白髯を引張つたまゝ、眤と空を見上げるのであつた。

勝手に近い椽頰の方から、勇ましい軍歌が初夏の情景に相應しく、清らかに漂ふ如く聞へた、二男の義夫が歌つてゐるらしい、義興は識らず〳〵其方へ歩を運んだ、案の如く、今年一中へ登つたばかりの義夫が、作爺と二人掛りで飛行機の摸形を作つてゐるのであつた。

「何をしてるんぢや。」義興は微笑して覗いた。義夫も作爺も一心にやつてゐたので、愕然つとして義興を見上げた「お父様か……好いでせう、飛行機……」と、未製品をぶら下げて見せる、母親が死去して以來は、姉の吉野に優しくされるのみで、家庭は至つて情味に乏しかつたが、此頃になつて、常に澁虫を咬んでゐた父が、妙に笑顔を見せるやうになつたので、顏色を窺にふやう目を丸くした。

「はゝゝは大工事だのう、それで宙返りでもせうといふのか。」

「えゝ出來ますよ、此所の所へ錘があるから、斯うやると。」と、義夫は機の前方の錘を示し、中央を以つて卒度投げて見た。飛行機は錘に依つてクル〳〵二

三回宙返りしたので「ねへ。」と、意外の成功に我ながら嬉しくつて堪らず大切さうに拾ひ上げた。

「はゝゝは宛然スミスのやうだのう。」

「ねへ！　大成功、嬉しいねへ。」義夫は雀躍するやうに言つた。

「坊様の大發明、是れぢやスミスも跣足だ。」

と、作爺も莞爾して言つた。

此三人を遠目に見て、急ぎ足に近附いて來たのは、一人娘の吉野であつた。品の好い面長だが、而かも無愛嬌に落ちず、目にも口にも女性としての優し味が溢れてゐる、母なき家庭だけに、心の働きが多いと見へて、年よりも一つ二

つ老て、二十一二とは誰にも見へる「お父様、お客様でございますよ、先程からお歌が探してゐましてよ。」

「然うか、誰ぢやな？」

「瀧山の老爺様ださうでございますわ。」

「瀧山？」と、問ひ返すのではなく、斯う呟やいて顔を曇らせた、聞き取れぬ程微かに舌打して、直ぐには動き出しもしなかつた。

吉野は父の氣色を一寸窺つて、直ぐ氣を更へたやうに義夫を振り返つた「何をしてゐるの、義夫さん。」と、優しい笑を浮べて飛行機を覗いた。

「ねへ飛行機。」と、義夫も誇りかな顔を上げて「是れねへ お姉様、好く宙返り

が出來るんですよ、やつて見ませうか。」

「好くつてよ、見なくつても――まだ未製品ぢやないの。」

「未製品だつて出來ますよ、出來ますよ、技士が上手なんだもの、ねへ。」と、義夫は前の如く輕く投げた、飛行機はシュ〜〜と三四回宙返りをするのであつた「ほら、ねへ、宙返り、出來るでせう。」と、大得意

「全く、巧妙く出來たわねへ、爺やの考案でせう。」

「うゝん、僕。」と義夫は顏を横に振つて「僕が技士で、爺やは助手だ、ねへ。」

「へゝゝへ助手になれますかい。」

「なれるかつて、助手ぢやないか。」

「へゝゝへ。」

「ホゝゝホ。」

義夫が餘り熱心なので、吉野も作爺も終に笑つた、けれど義興は笑ひもせず言語も云はず、無心で呢と見てゐたが、その儘己れの部屋へ歸つた。

小間使のお歌はそれと見て、椽頰傳ひに小走りに走つて來て「御前樣、お客樣でございます。」

「ウム、知つとる。」と、義興は膠無く言つて客間の方へ行くのである、お歌は言葉を續ける譯にもゆかず、二三歩後れて踵いて行つた。

客間には米壽にも垂々とした、眉毛まで眞白い、人相見の壽相の看板酷似の

一老爺が、焦茶の十徳を着て座つてゐた、それは、義興の養父の弟、瀧山伴兵衛なのである、桐胴の火鉢に掌を出して、ウト〳〵と無心で座つてゐた。

其所へ、お歌に襖を開けさせて、ノッソリ出て來たのは義興である。

「お待たせしましたねへ。」と、無愛嬌に座つた。

「オ、、義興さんか、久濶ぢやつたな。」と、瀧山老人は、頬が垂れるやうな圓滿な顔に、罪のない笑を浮べた。

「如何も御無沙汰して濟みませんぢやつた、遂何かと忙しいので……」

「イヤ、御無沙汰はお互ひぢや、俺もな、年を取ると出不精になつて、思つちやゐても、遂其臆刼になつてな、はゝゝは年は取りたくないもんぢやよ。」

「それでも、御壯健で結構ですな。」

「餘り結構でもないて、憎まれ口をきいて、嫌がられる位が落ちぢや、はゝゝ」と、意味あり氣に笑つて、心持前へ躙り出た「實はな義興さん、俺しや妙な事を聞いて、又其憎まれ口をきゝに來たんぢやが、貴公に限つて、此姉川家を潰すやうな事はよもや仕ちやゐなさるまいなア。」

「エ、決して……。」と、義興は打つて變つて快活に、白髯を撫でながら首肯くのであつた。

（四）

瀧山老人は瞥見と義興の頑固な顏を盜目にしながら、またも膝を火鉢に擦り寄せた。

「コリヤ他人の話だから、的にはならんが、貴公は近頃鑛山へ手を出してゐるさうぢやな。」

「……はあ、非常に有望な銅鑛が發見せられたから、日ならず採掘する準備をして居ります。」

と義興は瀧山老人を瞶めて、決然として言つた。

「エ、それぢや矢張り本統で……。」と、瀧山老人は意外の眉を上げて、躊躇うやうに眤と顏を瞶めてゐたが「鑛山へ手を出すとは、貴公は飛んでもない事

をしてくれたねへ、ぢや他人の話だけれど、姉川家の不動產を全部抵當に入れて、東海銀行から二十萬圓借りたといふのも本統ぢやな。」

義興は心持伏目になつて、煙草をたて續けに吸つて、灰を敲き落してゐたが天禀の豪岩なる個性を胸に張り詰めて「如何にも二十萬の融通はしました、然し、有望な事業に對する出資で、決して無駄にはなりません、熟錬な技士が踏査して、足尾にも劣らぬ鑛脈だといふのだから、成功は目に見へてる、少し遲まきだが、此義興が最一花咲かせて見せる。」

「そ、然う言ふ考へぢやから物が間違ふのぢや、鑛山なんて言ふ物は、金を持つてする仕事ぢやない、裸一貫の山師が、鎗を立てるか菰を着るか、なつたが

勝負でやる仕事だ、貴公は此姉川家を何と思つてゐるのぢや、何日も言ふやうぢやが、二十二代も續いた、廣い江戸にも一と言つて二と下らぬ長者だ、そりや貴公は華族に生れた方ぢやから、姉川家に幾等財産があつても、幾等由緒ある舊家でも、さう有難くは思ふまいが、然し斯うして相續して居れば、少しは家の事を考へてくれんと困る、大體から言へば、斯う言ふ事をする前に、一應俺に相談するのが當然ぢやないか。」

瀧山老人はねち〳〵意見の語氣を强めた。

「それは御尤なお話ぢやが、何も賣拂つたものぢやない、事業の爲に一時融通したのみで、採堀にかゝれば、一ケ年の内には屹度支拂をする、それが何も姉

川家に對して、瑕瑾でもなければ不名譽でもないと思ふ、のみならず、社會に對しては有益であり、事業としては尤も有望なのだから、寧ろ双手を擧げて賛成してくれるものと信じてゐた、貴公のお言葉なぞは、私としては聊か意外ぢや。」

瀧山老人は先程から何か言ひたげに口をモグ〳〵させてゐたが、さて義興の言葉が切れると、目を睜つたまゝ寸時言語が言へなかつた。

「誰が、誰が其麼事に賛成する者があるものか、馬鹿々々しい、博奕よりもまだ的にやならん、失敗したら如何する、失敗しても姉川家は立派に立つて行くやうな豫算があるのかな？。」

「失敗すれば止むを得んですなア、然し、萬々然ういふことはない、實に我國では他に比類ない程の鑛脈ですから……それや彼の鑛區を見ない者には解らないが、實に大したものぢや。」

「はゝゝは、何れやらうといふ者の目にや然うも見へうが、鑛山なぞといふものは、當にやならんものぢや」と、瀧山老人は嘲けるやうに笑つて「ア、、最少し早く解りや何とかなつたらうが、最うやつてゐるのぢや言つて見た所で仕方がない、まあ宜く考へてやりなさい、由緒ある姉川家が、貴公の爲めに潰れたとあつちや、御先祖へ對しても言ひ譯がないでな、若し予をして富を欲つせしむれば、十萬を辭して萬を受けん、孟子が宜く言つてゐる、俄慾は不可ぞな」

と、押へ付けるやうに言ふ。

「イヤ、私は決して富を望むのぢやない、富を望むのなら今の財産で充分だ、私は世間の金持のやうに、只だ暑い寒に安じて暮すのみでは滿足して居られん人間としての仕事をせにやならん。」

「それは宜い……宜いが、最少し慥かな事業がして貰ひたいのぢや、最少し家の爲めを思ふて貰ひたいのぢや、宜いかね、俺は、始めて聞いた時には、何故一言俺に相談せんかと、實は非常に腹が立つて、直ぐ尋ねて來たのぢや。」

「これは妙な事を聞きますねへ、此義興が戸主で、その戸主たる私が財産を自由にするのに不足がありますか、私は相談する必要はないと思ふ。」と、義興は

少し色を替へた、老爺のチチ〳〵した話を聞いてゐるのが、癇癖の彼には五月蠅かつたのである。

「何を言ひなさる、馬鹿な、俺を誰だと思ふてゐる、詫言の一つも言ふべき所ぢやないか。」瀧山老人も色を替へた。

「何故ですな、私が自由にしちや不可んと仰有るか。」

「然うぢや。」と大きく肯頭いて「一家の運命に抱はる事は一々親族に相談すべきものぢや。」

「はゝゝは其麼事で事業が出來るものぢやない、私が姉川家の戸主たる以上、私のする事に差手口は無用にしてもらひたいものだ。」

「何ぢや、其言ひ分は……」と、瀧山老人は口惜しさうに膝を拈るやうにしたが、漸やく虫を抑へて「ア、これだから我儘な華族なぞ養子にしちや家の爲めにならんと言つたのぢやが先代が名門に惚れ込んで、貴公を養子にしたのが家の破滅ぢや、日々に憂き事のみぞ積り來て、やがて地獄へ擔ぎ込むかも、これが俺の最後の意見ぢや、折角家の爲めを思つてやりなされ。」と、重い腰を上げた。

斯う言はれて見ると、如何な義興も心持は宜くなかつた。心細いやうに意氣が沈んで、肯頭たまゝ後姿を見送つて腕を拱いた……大鑛區、完全な準備、採掘、大成功……、彼れの胸には一時に斯麼感じが起つて、野心と誇りに高踏し

た。

「何に、今に舌を巻かせてやる。」と、思はず呟いて何物かを瞶めるのであつた。

其所へ小間使のお歌が、静かに這入つて來て、電報でございますと差し出した。

「然うか。」義興は手早く取つて封を切つた。走り書の假名を一字々々拾ひ讀みにして、見る〳〵内に顔色を替へた。手先がブル〳〵顫へ出した。製錬所出火の急報なのである。

「エ、、だゝ駄目だ。」と、膝を掻きむしつて、唇を咬んだ、不慮災害！不運惡運!! 萬事窮矣!!! 今の今まで大成功を期してゐた義興の双眼には、無念の涙が溢

れるのであつた。

（五）

製錬所の出火は、農産物に害があると言つて不平を申込んだ百姓の仕業とは知れてゐたが、範圍が廣いので犯人を擧げる事は容易でなかつた。假令犯人が擧つたにしても、義興の損害の償ひにはならない。數萬の資を投じて買ひ込んだ多くの機械は、燒けて悉く使用に堪へるものはない、僅かに殘つたのはトロッコの軌道位のもの、二十萬圓の資本を、悉く溝に捨てたも同じ有樣で、此上採掘するには少くとも十萬なくては手が付けられぬのである。

義興の無念は絶頂に達した、口惜んでも泣いても、最う追付かない、俄に放蕩の夢から覺めて歸京した久四郎に、攫みかゝらんとする程叱り飛ばしたが、それとても今は歸らぬ後の祭、然かも天災とあれば如何する事も出來ない。

「ア、私は殘念だ、如何考へても殘念だ。」瀧山老人の言葉を思ひ、親町子爵の忠告を思ひ返して、立つても居ても居られぬ口惜しさであつた。

「誠に申譯がございません、此久四郎の不行屆から、非常な失態をいたしましたが、何とかして又……。」と、久四郎は忠實に言つた、無念さうには見へても、金錢を塵芥の如くに費つて、自分だけは永い間贅を盡したのだから、何れにしても構はない地位、同じ殘念にしても義興の比ではないのである。

「何とかも彼とかもあるものか、全部、根こそげ財産を捨てゝ了つたのぢや、此姉川家を潰して了つたのぢや、私の最後の一花は、芽萠まぬ間にむしられたのぢや、引きむしられたのぢや。」義興の眼からは熱い涙が滴り落ちた。

「御尤でございます、實に痛恨の至りでございますが、此上は誰か資本家を見付けまして、再擧を計るより外に致方はございません、天災とは言ひながら、私の不注意から起つたことでございますから、屹度資本家は拵へてお目にかけまする、萬望御安心下さいませ。」久四郎は思ひ入つて言つた。平蜘蛛のやうに疊に頭をつけて詫び入るのである。

斯う言はれて見ると、義興は久四郎に怨みがましく言つたのが女々しくも思

はれた「イヤ、私に運がないのぢや、運がなかつたのぢや、人間は運命に克つ事は出來んのぢやからなア。」

「はい。」久四郎は恐れ入つた。

「私は人間と生れて、人間としての使命を持つて生れて來なかつたのぢや、一生金の番をするべく生れて來たのぢや。」と、怨ずるやうな歎息。

「決して、左樣ではございません、さう御悲觀なさつたものぢやございません成功は萬難の向ふにあるのでございます、敗れて屈せざる、これ功をなすの因なりとありまするからねへ。」

「然し、私には最う一錢の財もないのぢや、姉川家の財產は燒けて了つたのぢや。」

「でございますから、私が何とかして資本家を見付けます。屹度見付けまする」

「心當りでもあるのか。」

「はい、無いでもございません。」と、久四郎の語氣は確ではなかつた。事實彼には心當はないので、只だ一時を安める口實に過ぎなかつたのだ、其內には有るであらうと自分でさへ危ぶんでゐるのである。

「では、銀行の期限が來ない內に、早やく奔走してくれ、若し此儘になるとしたら、私は瀧山に對して面目ない、親町子爵にも竹小路伯爵にも逢せる顏がないのぢや、どうか賴むぞ。」

「承知いたしましてございまする。」

久四郎は的確と引き請けた、けれど、依然として心當はなかつたのである毎日東奔西走して、野心家を搔き口説いたが、話に乘るものは一人もなかつた今暫らく〳〵と延ばしに延ばして、終に姉川家の財產が奪い去られる期限が來た。銀行からは矢を射るやうな催促である。

「嗟、愈々私の窮境は迫つた、家の滅亡は迫つたのだ、吾妻、何とか宜い工風はないかのう？。」

「はい、今暫らく猶豫がございますれば、又何とかなりまするが……。」

「えゝ、貴樣の今暫らく當にならん、此儘親子四人が、此家を追ひ出されるより外に方法はないのか。」

「はい、最う斯うなりましては……。」

「無念ぢやのう、殘念ぢやのう。」義興は顏を反けて唇を嚙んだ。

「何所か、狹い所にお引越しなされまして、時機をお待ちになつた方が、却つて得策かと孝じます、窮すれば通ずと、又宜い事もございませう、その內には屹度資本家も見付けまするで……。」久四郎は顏色を窺ひながら言つた。

「嗟！、無念だ、如何しても此事業に成功しなきや置かん。」

義興は撫然として拳を握つた。

（六）

小石川の上富坂の中途から、右へ折れて一丁ばかり行つた所に、上下で三間ばかりある二階建の、古い格子戸の嵌つた家がある。入口に打け付けられた姉川寓の門表は、まだ墨の跡が新らしかつた。

無謀な企圖だつたとは言へ、不時の災害に逢つて、二十幾代も連綿と續いた姉川家は、一度家運が傾いて、僅か一年經つか經たぬに、代々の住家を人手に渡し親子四人が世を忍ぶ侘住居、長男の義郎は帝大法科の二年生であつたが、弟の義夫と共に學を廢さねばならなかつた。

殊に氣の毒なのは、勝手なぞへは且て覗いた事もない吉野で、つい此間までは下女小間使にかしづかれた身が、木綿着に、エプロンをかけて、馴れぬ襷掛けの水仕事、知らぬ者は何でもないが、知つてゐる者が見たら涙の種である。

「お姉様、僕が水を汲んで來て上げますよ。」義夫は以前から姉思ひであつた。姉が手を赤くして朝飯後の食器を洗つてゐるのを見て、唐になつた洋桶を提げた。

「義夫さんに汲めて？。」

優しい弟の情に、いた〳〵しさうに顏を見上げた。

「大丈夫ですよ、何も彼もお姉様が一人でするんですもの、僕はお姉様が氣の

毒だ。」

義夫は甘つたれたやうに、早熟た口調で言つた。

「義夫さん、有難うよ。」

吉野の眼からは油のやうな涙が、タラリと流れ出た。義夫も涙が出たと見へて、腕で目を小擦つて、言もいはず逃げるやうに、水道端の方へ走つて行つたまだ十五の小供だが、一家の不運は充分に會得してゐるのである、吉野はそれが不愍しくて堪らなかつた。濡手のまゝ襷掛けの袂の端で、人知れず涙を拭ふのであつた。

座敷では朝飯を終つた義興と義郎が、火鉢を隔てゝ對座してゐた、以前のや

うな大きい家庭では、滅多に顔も見ない位であつたが、此家へ越してからといふものは家にさへ居れば互に議論して日を送るのであつた。

「お前には最う學問に不足はない譯だから、相當な考へがあるぢやらう。私のした事が惡いといふのか、無爲徒食するのが宜いといふのか。」と、義興は鋭い目で睨み付けるやうに言つた。

「イヤ然う言ふ意味で言ふのぢやありません寧ろ事業をやるといふことは、私も大に賛成です。」と義郎は判然といつて「然し、たゞやるのぢや駄目です、宜く研究に研究を重ねた上、周到な注意と、愼重な態度を以つてやらなきやなりません、私は……忌憚なく言へば、此注意と態度と、加ふるに研究が缺けてゐ

たと思ひます。」

「では私に、鑛山學を研究しろといふのか、技士になれといふのか。」義興は詰寄るやうに言つた。

「然うぢやありません、經營の方法を研究しろといふことです、技術ぢやなくつて事業なんですからねへ。」

「無論さ、だが私の失敗は、經營を誤つたのぢやない、天災だ、不慮の天災だ。」

「天災には違ひありませんが、假令探堀する運びに至つたとしても、或は營業上の失敗を來たすかも知れませんですよ、第一吾妻に全權を任せたのが私には其意を得ない、慥に貴父は人撰を誤つてゐらつしやる。」と、義郎は癇癖な父の

顏色を窺ひながら言つた。

「馬鹿な事を言へ、吾妻の行爲に依つて天災が起つたのぢやない。」

「それは然うですが、吾妻は適任者ではありません、私は慥かに然う信じて居ります。」

「生意氣な事を言ふな、貴樣に吾妻の眞似が出來ると思ふか。」義興は一歩も半歩も、決して人に讓らぬのが大なる性癖であつた。

「私には出來ません、元々私の問題ぢやないのですから、吾妻其人に就いての問題ですからねへ。」義郎も負けてはゐなかつた、矢張、幾等か父の性を享けてゐると見へる。

「えゝ最う可い、貴様まで私のした事を兎や角言ふか、アゝ金が欲しい。」義興は天を仰ぐやうに顔を反けた「生れて始めて、恁麼に金が欲しいと思つた事はない、金！、金!!、私や零落果てたのちや。」

義郎は默然と腕を拱いて、太い溜息を吐いた。父の呪ふやうな言葉を聞くと一家の者が深い奈落の底へ落ちて行くやうな、儚なさと心細さが胸は迫つた。且ては花やかであつた姉川家が、黑い布で包まれたやうに思はれる。

「金が欲しい、金が欲しい、私しや最う一度元の姉川家にしなきや、死すとも冥する事は出來ん。」義興は熱にでも浮かされてゐるやうに呟いた。腿のあたりを力任せに犇と攫んでゐるのである。義郎は伏目ながら父の苦悶の有樣を瞥見

と見るには見たが、さて慰める言葉とてもなかつた。出るものは溜息ばかりである。

「御免下さい……御免下さい……。」

表で訪れる聲がした、壁一重の長屋建だから、隣りか自家かと聞耳を立てゝゐると。

「はい。」と、吉野が優しい返事をして勝手元から出て行つた。

（七）

鴇色の太い襷を外しながら、膝を衝いて靜かに障子を明けた吉野は「あら。」

と訪客を見て驚いた「入來つしやいませ。」と慇懃に三ッ指をつく。

「ヤア、矢張り此所でしたか。」

訪客は三十二三の、綿大島の絣に、少し色の變つた木綿の紋付を着た男である、太い櫻の洋杖に舊式の中折を被せ、急性のやうに四邊を見廻して戸尻の所へ靠せた。

「萬望、汚い所でございますけれど……。」

吉野はドギマギして言つた。馴れぬ世帶の苦勞よりも、變り果てた侘住居へ以前を知つた者に訪ねられるのが何よりも苦痛だつたのである。

「變りましたねへ。」身體の巖丈に似合はず感じの強い男と見へて、今昔の感に堪へぬやう、悵然として言つた。

「はい。」と吉野は思はず俯向いた。

訪客は吉野の胸中を察したのか、急に氣を引き立てるやうに「兄さんはお居でゝすか、先達て遇然神田で逢ひましてねへ、やつとお住居が解つたからお伺ひしたのです。」

「左樣でございましたか、さあ萬望……。」

「姉川も酷い、僕に移轉先を知らせんなんて——。」と、捨て臺詞のやうに言ひながら、不遠慮にのし上つた。けれど、たつた二間の奥には父と兄がゐるので二階へ案内するにしても一先づ兄に取次がうと、吉野が境の障子に手を掛けや

うとすると。

「大谷君かい。」と、義郎が先きに出て來た。

「ヤア、居たね。」大谷は上口に衝っ立つてゐた。

「如何だ、驚いたらう。」

「何故？。」

「汚いからさ。」と、苦笑を含んだ。

「驚くものか、君は元來貴公子だから然う思ふんだ、俺なぞのやうに年中貧乏してゐる者は平氣だ、靜かで寧ろ理想だ。」と家中をグルリと見廻す。

「まあ、二階へでも上り給へ、座る所もない。」と義郎は先きに立つて階段へか

かりながら言つた。

「ウム。」と、大谷も踵いて行く、義郎とは五ッも年上で、學校も一年上であつたが、如何いふ譯か二人は非常に親密な交友であつた、名を幸藏と云つて、幼少の時に両親を喪ひ、叔母なる人に養はれて、一高を出るまでは何事もなかつたが、大學に入ると同時に、叔母は自分の娘と婚約を強つた、けれど彼は佐賀バッテンの田舍娘が嫌やであつたのか、但しは言ふが如く重婚を罪惡と見たのか、斷然叔母の言葉を排した、そして、叔母から學資を斷たれると、惡戰苦鬪して自から學資を得ながら、中途で二回も休學して、あと一年といふ所まで漕ぎ付けたが、又此春から休學して、某中學に教鞭を取つてゐるのである。

大谷幸藏は二階へ上り切ると「ヤア、これが君の書齋か。」と、又グルリと四邊を見廻しながら、腰の高い窓へ覗いた、本郷の原塲も見へるねへ、見晴しがよくつて可いや、今までのやうに私有の庭園を樂むより、此四圍の情景を庭園として樂むさ、先づ砲兵工廠を炊事塲位に思つて……。」

「相變らず君は暢氣だねへ。」義郎は苦笑した。

「暢氣と云へば暢氣さ、これが貧乏人に產れたお蔭だ。」

「僕も貧乏人に產れたかつた。」

「フム……蓋し夫れが君の衷心の叫びだらう、貧乏人は富を趁ふに切だ、窮する者は光明を見出すに忠實だ、弱者は强者よりも常に內部が充實してゐるからね。」と、大谷は眞劍な態度で、同情ある口吻で窓を離れた。

其所へ吉野が座布團を持つて來て、閑雅に進めるのである。

「ヤア有難う、濟まんですなア、萬望關はんで下さい、貴女の勞を煩はすといふことは、僕として忍びん所です、女中が居ないのぢやア嘸ぞ忙しいでせうねへ。」大谷は吉野を恐ろしさうに瞥見と見て、アタフタして言つた、つい此間まで常に縮緬の被布なぞ着てゐた人が、俄かに木綿縞の着物に前垂をかけ、頭髮さへ自分で束ねたらしい質素な束髮、痛々しい程細そりした手で、洋桶を提げたり米を研いだりするかと思へば、荒いうき世の波風と戰つて來た大谷幸藏には、其苦痛が推し量られたのである。

「イ、エ、始めは如何して可いか解りませんでしたけれど、段々ねへ……」

「然うでせう、お察しするです。」

話は途切れた、三人とも無言で同じやうに、人の境遇の變遷して行く有様を思ひ浮べてゐた。

「粗茶でも……。」と吉野は義郎に相談するやうに言つた動機に、立ちはぐれた膝を上げた。

「ウム、」と義郎が肯頭く、

「イヤ、君、不要、御令妹の手を煩はしては却つて心苦しいです。」

「ホ、、ホですけれど……、」と、吉野は遂笑つた。狼狽者の大谷の言ひ方が可

笑かつたのである。

「萬望、お願ひですから、關つてくれ給ふな、僕は欲しけりや勝手で水でも饗應れます、ねへ、可いですか。」

「だつて貴郎……」

「イヤ不可ません〳〵、僕は歸ります。」と、大谷は周章て居住を直した、卒直で同情に富んだ彼は、少しでも自分のために吉野を勞するといふことが、氣の毒で〳〵、寧ろ罪惡のやうに思はれたのである。

「まあ……、」と、階段を下りかけた吉野は惘れた。

（八）

「不可んですねへ、トウ〳〵貴嬢の手を煩はした、僕はお客扱ひにされるやうな柄ぢやないのですからねへ。」

吉野が茶盂と菓子器を持つてくると、大谷は心から眉を顰めて斯う言つた。

「其麼に有仰やるやうな物ぢやございませんの、本統の粗茶でございますから……。」

「遠慮する柄でもないぢやないか。」義郎が笑ひながら言つた。

「然う言やさうだが、濟まんですねへ。」と大谷は吉野に會釋して「ぢや折角だ

から遠慮なく御馳走になります。」と菓子器の煎餅を抓んだ。

「萬望。」と、吉野は輕く會釋して下りて行く、それを眤と見送つた大谷は、俄かに心氣一轉して「でも感心に勉強してゐると見へるな。」と、机の上をちら〳〵見て、煎餅をバリ〳〵食ひながら言つた、大體が邪氣のない、無遠慮な男だから、出されて見ると、口ほどにもなくバク〳〵食ふ。

「莫迦々々しい、勉強なぞするものか、机に向へば徒らに煩悶するばかりだ、僕は手も足もがれたやうに、如何する事も出來ない。」

「意久地のないことを言ふなよ、君に對しては宜い刺戟ぢやないか、發憤しろ〳〵、猛烈に地位を趁へ、富を趁へ、哲學者が何といはふと闘やあしない、其

所には内部が充實してゐる、僕を見給へ、誰が如何してくれなくつても、獨りで此腕で生きて行つてゐるぢやないか愉快だよ、面白いよ、要するに人間は自分自身の力で生きて行くほど愉快な事はない、價値ある事はない。」大谷は熱心に言つた。

「君は宜いさ、何れにしても一人なんだもの、自由の王國だ、然し、僕は責任があるやうな無いやうな、譯の解らぬ境遇だからねへ。」

「それは無理もないさ、俄かに境遇が變つたのだもの、然し、煩悶した所で何にもならないぜ、煩悶なんて言ふ奴は、全く半文の價もない奴だよ。」

「オイ、洒落かい、僕は君が羨ましいよ。」と、義郎は微笑した。

「羨ましかつたら大にやるさ、御嚴父の事業を大に助けるさ、それが子としての義務だ、君としての取るべき道だ、僕は切に勸める。」

「父の事業……僕も夫れは思はんぢやないが、父はあゝ言ふ氣質だから、僕なぞの言ふ事は聞き入れちや呉れない、よし假に聞入れるとしても僕には言ふだけの智識はない……假令有つたとしても、目下は只だ金の問題なんだからねへ、父は金を熱望してゐるんだ。」

と、義郎は太息を吐いた。

「其金も得られるさ、君が望めば得られるさ。」

「所が君、運命は冷やかだからねへ。」

「君は駄目だ、非常に消極的になつてゐる、非常に悲觀的になつてゐる、心が顚へてゐる、それぢや何をしても駄目さ。」と、大谷は顏を覗いて叱咤するやうに言つた。

義郎は何とも答へなかつた、二人は暫らく無言に落ちて、バク〳〵大谷が煎餅を嚙む音のみ景氣よく聞えた。

「お兄上樣。」と、義夫が急ぎ足に上つて來た。

「大谷は懷しさうに振り返つて「義夫さん、如何したね。」

「……如何もしないんですけれど、」と、義夫はテレ隱しに窓へ覗いた、實は姉の吉野から好きな大谷が來たと聞いて、大急ぎでやつて來たのであつた。

「義夫さん〳〵、煎餅を食はないか。」

義夫は振り返つて否頭を振つた。

「何故？、嫌かね。」

「イ、エ……だけと不要んです。」

「はゝゝは遠慮したね、遠慮するもんぢやない……大部久しく逢はなかつたから、今日は僕と大に遊ばふ、又毬投げをやらうかね。」

「エ、、だけど駄目ですよ、此家ぢやする所がないんですよ、貧乏しちやつたから——。」

「貧乏しちやつた！。」と、大谷は目を睜つた「義夫さん、其麼ことを言ふもの

ぢやない、是から又以前の倍も二倍も金持になるんだからね、義夫さんも出世せんと不可ん……此頃は、學校は如何しましたね。」

「退校つたんです。」

大谷は義夫の顏を眤と見た「然うですか。」と、暫らくして嘆息するやうに言つて「ぢや僕の行つてゐる學校へ入來つしやい、ねへ姉川君、義夫さんを退學させるなぞは慘酷だ、僕の學校へ寄來したら如何だね。」

「有難う。」

「是非寄來し給へ、君は最う充分だが、義夫さんに學校を廢させては前途が案じられる。」と大谷は熱心に言つた「ねへ義夫さん、お父樣やお兄樣に相談して

是非來給へ、ねへ宜いかね。」

「行きたいんですけれど……お金が澤山要んでせう。」

「エ、ッ！」と、大谷はまた目を睜つた、俛首く義夫の顏を瞶めて「君も世間の風に當つたねへ、うき世の波に觸れたねへ。」

「大谷君！……僕は如何したら、可いんだらうねへ。」と、今迄默つてゐた義郎が、眼を霑ませて言つた。

（九）

「不可ん〳〵。」

大谷幸藏は遂同じやうに沈默に落ちてゐたが、俄に憂鬱の空氣を破るやうに磊落に言ひ放つて「下らん事を考へちや不可ん、君は毎日斯麼所へ蟄居つてゐるから、猶ほ陰鬱になるんだ、少し外界の空氣を吸ひ給へ、散歩でも仕給へ、僕の所へ來ないなんて言ふのが第一間違つてゐる。」と、怒るやうに言ふ。

「有難う、惡く思つて呉れ給ふな、惡氣で行かなかつたのぢやないのだから……僕は、人に顏を見られるのが何だか嫌やでねへ、晝間なぞ滅多に出た事はないんだ。」

「だから不可んよ、大に出たら宜いぢやないか。」と、詰るやうに言つて「君は兇狀持ぢやないだらう、誰に憚る所があるものか、出給へ〳〵、大に濶歩し

給へ、前途は遼遠だ、勝利は最後にあるんだ。」

「僕は君、然う言ふ空想的な、理想的な言葉で安じてはゐられないよ、最少し實裁的な、事實的な現實に處して行かなきやならんのだ。」義郎は口惜しさうに力强く言つた。

「現實？。」と、大谷は聞き咎めて「無論現實さ、決して空想ぢやない、理想ぢやない、大なる責任を持つて、大に努力し活動して、光明に向つて歩を進めるのが君の現在だ、隱遁して人目を忍ぶ必要が何所にある、君は仙人になる目的ぢやないだらう。」

「だけど君、その活動し努力するには、周到な熟考を要するよ。」

義郎は自分一人で判斷の出來ない事を、相談するやうな態度で言つた。

「それが君、斯麼所に蟄居つてゐちや宜い考へは出ない、行爲が消極的だから隨つて考へる事も消極的な、隱遁的なものになつて了ふ、考へる時には、一層快活な心持ちで考へなきや不可ん。」

「ナアニ、それや不可ん、快活でないから、不愉快だから考へるんで、快活なら最早や考へる必要はない。」

義郎も少し油が乘つて來た。

「莫迦を言ひ給へ、僕の言ふのは、快活な位置に身を置くといふ意味だ、早い話が、斯う言ふ一室よりも、町の角に立つて、勇ましく生活を營んでゐるのを

見ながら考へろと言ふんだ、月下の橋に立つて考へて見給へ、何でもない者までが必ず心は感情的になるよ、消極的になるよ、過去を思ひ、將來を念ひ、種々の連想を浮べて——ねへ、これに反して烈日の下に立つて、勇ましく、快活に各自の生活に奮鬪してゐるのを傍觀しながら考へて見給へ、自殺を計るか、然らずんば全身の肉が躍るぢやないか、血潮が沸き上るぢやないか。」と、大谷は拳で空を打つて「これをしも、平然として見てゐる奴は、幸福な奴……まあ幸福として置け……か、或は莫迦だ、白痴だ。」

義郎は幾度も肯頭いた、大谷は眤と其の顏を瞶めてゐたが、すぐ俄然と調子を更へて、

「だから、僕と一緒に散歩し給へ、さあ出掛けやう、義夫さんも行かふねへ。」

先刻から二人の顔を見較べながら、心配さうに見てゐた義夫は「何所へですか。」と、嬉しさうに言つた。

「然うだねへ、何所が宜からう、此所からは上野が近いから……さうだ、海事博覧會へ行かふ。」

「海の博覧會？、」と、義夫は微笑した。

「然う、海の博覧會、義夫さんはまだ行かないでせう。」

「エ、、此家へ來てから何所へも、一遍も行かないんです。」

「ぢや丁度宜い、さあ姉川君、行ふ。」と、氣早な大谷は立ち上つた。

「愈々引張り出されるのか。」

「當り前さ、斯麽所でクヨ〳〵してゐちや駄目だ。」

義郎も立ち上つた、義夫はそれと見て、眞先に梯段を下りて、

「お姉上様、お姉上様、僕ねへ、お兄上様と大谷さんと、海の博覧會へ行くんですよ。」

「まあ……本統に……、」

「エ、、本統に行くんです、嬉しいねへ、お姉上様も行くと宜いんだけれど。」

義夫は嬉しさうに、一所で駈足をしながら喜ぶ、

「ではねへ、羽織だけ着更へて行くと宜いわ。」

吉野は針仕事を押し出して、押入から荒い絣の羽織を出して着せた。義興は煙草を吸ひながら、苦味い顔をして瞥見と見たばかり、

「義夫さん、如何だね。」と、大谷が次の間から呼んだ。

「行きますよ。」

義夫はいそ〳〵と飛び出して來る、吉野も跡から踵いて來て、

「御散歩に連れて行つて頂くのだすつてねへ、まあ、大喜びなんでございますわ。」

「稀にやね、散歩せんと不可んです。」

「さうですわねへ。」

「では失敬、直き歸りますよ。」と、大谷幸藏は帽子を取つて洋杖を提げ、義夫の手を曳いて威勢よく表へ出た。

（十）

此邊は極く質素な勤人向の家ばかりで、大して人通りもなく、淋しい街であつた。兩側とも古い蔭氣さうな家屋ばかりが建ち並んで、新らしい建物は少なかつた。

大谷幸藏は義夫の手を曳き、片手に太い洋杖を突きながら、口の内で軍歌らしいものを口吟んで、大股に歩いた、義郎も二三歩遅れて早足に歩いた。

富坂を電車が一臺這ひ上つて、町の端れを横切つた、義夫は逸早くそれと見て、調子付いた聲で、

「電車！。」と譯もなく言つて「彼の坂を下りた所で、電車に乘るんですねへ、」

「然う、義夫さんは宜く行くだらう。」

「エ、、餘り行つた事はないけれど、お姉上樣と買物に行きましたよ。」

「はあ、何を買ひに行つたね。」

「何つて……お味噌……。」

「はゝゝは味噌を？」

「彼所のね、坂を下りて左の方へ行くと、安い家があるんですよ。」と、義夫は

笑はれたので、辨疎するやうに言つた。

「義夫さんも偉い事を知るやうになつたねへ。」と、大谷は惘れて顏を見た。何事も知らない大家の坊ちやんが、僅か二月程の間に斯うも變つたかと疑はれるばかり、これに付けても、姉川家の窮狀は大略察せられるのである、世帶なれゝぬ令孃吉野の苦衷、義興、義郎の煩悶、考へて見れば眞に無理からぬ事であつた。

大谷幸藏は、それからそれへと心が暗くなつて行くので、自分で自分の心を引き立てるやうに「さあ。」と、義夫の手を曳いて、一層大股に歩き出した。

義夫は小走りに走りながら「お兄上樣、早く來つしやいよ。」と、心配さうに

振り返へつた。

大谷もそれと氣が付いたやうに「ウム、姉川君、早く來んか。」と、何事か考へながら遲れて來る義郎を振り返つて、少し足を緩めた。

「早い足だねへ。」

大谷は別に返事をしないで、待ち心で歩きながら、義郎が足を早めて近付くと「又考へてゐるねへ、君身體を惡くするぜ。」と、同情ある眼差を向ける。

「ウム……。」

義郎は力なく言つた。

「君の境遇には同情する、非常に同情する、然し、君今そんなに考へた所が仕

方がないよ、今日は悠々と遊び給へ、及ばずながら僕が相談に乘らうぢやないか、世の中に處する方法に就ては、君よりは少し長けてゐる積りだ。」

「有難う……。」

と、義郎は多感的な目で謝した。

「僕は、君の一家がこれほどまで窮遇に陷つてゐやうとは知らなかつた、君が煩悶するのも無理はなからう、無からうが今は仕方がない、其内には如何にかなるよ。」

「それさ、結論は常にそれだ。」と、義郎は終に投げ鎗に言つた、財産はなく收入はなく、日一日と迫る一家の運命を思ふと、頭惱が自然と搔き亂れて考へて

ゐながら考へは付かなかつた、今までは且つて想像もしなかつた境遇に、俄に零落したのであるから、無理もない事である、大谷は其心持ちに自からなつて見ずには居られなかつた、そして、無理はない、無理はないと思ふと、同情に富んだ彼は、嫌やに濕つぽい暗い感じが胸に漲つた。

「ア、、宜い陽氣だねへ。」と、彼れは萬感を衝き退けるやうに呟いた。

「これぢや花も直ぐ咲くねへ。」と、義郎も氣が晴々したらしい。

「さうさ、早やいもんだよ、奴等は凝乎してゐるやうでも、年が年中營んでゐるんだからねへ。」

大谷は譯もなく斯う言つた。そして、言つた後で自分でも何故彼麼事を言つたのかと、考へて見て妙に思つた。三人は無言で、春日町の方へ坂を下りた。

春日町の赤い電柱の側には、乘客が澤山待つてゐた、一臺停ると乘替客が一、乘客が押しかけて、交叉點をキョト〳〵しながら、往きつ來つする、旗、持つた信號手は、電柱を楯に遠い左右を見廻してゐる。

大谷等の一行は、富坂上から下りて來る電車を、眤と瞶めてゐた、段々近いて來るとブラ〳〵搖れてゐる赤い滿員札が見へた、次ぎに、龜澤町行きと書いたのが、次第に字が見へて、間もなく鼻の先きへ停車した。

十四五人の乘客は、前後の入口に縋つて我先きにと競ふ、車掌は口健にそれを制して、風呂敷包の田舍者、子供を負つた女房、マントの紳士、ハイカラの

妻君……と七八人の乘客を下して「お待遠さま」と許しを出し、中程の方……と車中へ聲をかけた。

三人は此滿員の電車の、車掌臺に立つ事が出來たのである、電車は間もなく發車して、又坂を上り出した。

「ねへ君、切通で下りやうか。」と、大谷が言つた。

「何所でも好いさ。」

義郎は一段高い入口に立つてゐた。

滿員の電車は割合に早く、切通下へ着いた、其所でも待つてゐた客が入口を塞いだ

「面倒臭いから下りやう。」と、大谷は義郎の袖を引いて、四邊の人を押し分けながら一番に義夫を下車さした。

「隨分混んでるんですねへ。」と、義夫は吻として惘れて、後から下車る義郎を待つた。

「ねへ、有造無造がウンと出やがる。」

三人は義夫を中に挾んで、岩崎の前を池の端へ出た、ポカ〳〵した陽氣に浮れ出した人は夥しい。

「ア、彼所ですねへ。」

池の端へ出ると、義夫は一番に舊外國館を指示して、焦燥いだ調子で言つ

た。

「さう、義夫さんは行つた事があるでせう？。」

「有りますよ、家庭博覽會の時に、お姉上樣と、親町のお姉上樣と、叔母樣と千枝さんと、行きましたよ。」

義夫は一人で喋つた、大谷はそれに一寸肯頭いて見せ、

「はて、入口が彼所らしいから、此方へ廻らうか。」と、目で右手を示した。

「さうさねへ。」

三人は池の椽を右手へ廻つた。

辨天樣の邊から海博の正門へかけて、恰度蟻が家越を始めたほど、ゾロ〳〵

切れ目なく往き來してゐる。

「却々景氣が好いねへ。」

「陽氣がこれだからねへ。」

三人も矢張り有造無造に入り混つて、ゾロ〳〵正門へ行つた。三ッ四ッ列んだ入場券の賣場へ、客は次から次へと押しかけてゐる、大谷は義郎兄弟を正門の横に立たせて置いて、其賣場へ割つて這入つた。

義郎は無心にそれを見送つてゐたが、丁度眷後を一臺の幌自動車が通つて、人混を避けた池椽へ停つた。義夫は默つて夫れを見返つて、やがて下り立つた十四五の令孃、目の覺めるやうに立派に着飾つてゐるのを見て、

「ア、千枝さんだ、ねへお兄上様、」と、義郎の袂を引いた「ねへ千枝さん、お姉上様も……、」と、慌てゝ其方へ走つて行つた。

（十一）

千枝子といふのは、親町子爵の令嬢で、姉の邦子は義郎と婚約の仲であつた。

「千枝さん！」

義夫は懐しさうに走り寄つた。

「アラ、義夫さんだわ。」と、千枝子は可愛い目を睜つて驚く「誰れと來て？。」

「ねへ、僕、お兄上様と大谷さんと……。」

「さう。」と、千枝子は今自動車から下りる姉の邦子に「お姉上様、義夫さんがゐてよ。」

「まあ珍らしいわねへ。」と、床しい笑を浮べて近付いた。邦子は最うそれと知つてゐたらしい、嫂婷とした細面の、如何にも品の好い令嬢、年齢も盛りの二十一で、金にあかした裝ひと。天稟の美と相俟つて、目の覺めるばかりの美しさである。

細そりと、透明るやうな綺麗な手が、そつと義夫の手を取つた「誰と入來つして？。」

「ねへ、お兄上様と……それから最一人誰かと來たのですつて。」と、千枝子が言つた。

「大谷さんです。」

「さう。」と、邦子は正門の方へ、晴々しい顏を上げた、そして其所に立つてゐた紺絣の羸貧しい義郎が、振り返へつてゐたので弗と視線が逢つた、邦子は遠目ながら會釋した、義郎もそれが通じたと見へて、進まぬ足で近付いた。

事實は婚約の仲ではあるが、父の失敗以來往復もせず、轉居先きも知らせず識らず〳〵遠ざかつて、殆ど絶縁してゐた間柄、向ふで出入を厭ふよりも、此方で顏を見られるのが苦痛であつた。彼は義夫が走つて行つたので、穴があれ

ば這入りたいとまで思つたが、それと知られて身を隱すのも妙でないと、立ち騷ぐ胸の動悸を凝と抑へて、邦子と視線が逢ふまで知らぬ顏をしてゐたのである。

「暫らくでしたねへ。」と、義郎は感じの多い胸を制しながら、力めて無心經に言つた。

「お變りはございませんか、此頃は、些とも入來つして下さいませんのねへ、吉野さんは如何遊ばして？。」

吉野と邦子は、學習院を同時に卒業した睦じい仲であつた。

「吉野は達者ですがね……姉川家は變りましたよ。」

義郎は、抑へる事の出來ないほど、感情が昂るのを怺へてゐた。

「さうでございますつてねへ、妾、お案じゝて居りましたわ、お住居は何方でございますの、吉野さんが嘸ぞねへ……。」と、邦子は變り果てた義郎の風采を見て、眦に溜つた涙を半帕で拭つた。

入塡劵を二枚半買つた大谷は、妙な顏をして四邊を見廻してゐたが、それと見てノコ〳〵近付いた、そして、少し離れた所から呢と見てゐた。

自動車から下りた親町子爵は義郎兄弟と知つて「オイ〳〵何をしてるんだ。」と、厭やな顏をして聲をかけた。四十五六でもあらうと思はれる立派な御前樣である、義郎とは義理ある叔父甥の仲で、父義興の生家、竹小路伯爵夫人の弟

に當られる人である。

「ヤア、これは叔父樣でしたか、御無沙汰いたしました。」と、義郎は慇懃に挨拶した。

「何だ其風采は……。」と、親町子爵は以ての外の怒氣を含んで言つた。

「面目次第もございません。」

義郎の目には涙が光つた。言はれなくとも零落した彼は、顏を見られるさへ慚愧に堪へなかつたのに、不躾に斯う言はれては、無念も殘念も通り越して、同情のない冷やゝかな子爵の言葉が怨めしかつた。

「私の忠告を容れんから斯う言ふ結果になるんだ、以後親町家とは斷然絶縁す

る、義輿さんに然う言つてくれ。」

「エ、ッ！。」

義郎は涙の眼を上げて、口惜しさうに唇を顫はせた。

「お父様……そんな事を有仰つて……。」と、同じく邦子も涙を堪へて言つた。

「お前の知つた事ぢやない。」

「貴郎、此所で其麼ことを有仰らないで、姉川家へ公然申渡したら宜しいぢやございませんか、義郎さんの知つた事ぢやございませんもの……。」

子爵夫人も堪り兼ねて口を入れた。

「イヤ、居所さへ知らさない位だから、使を遣る事も出來ない、此所で逢つた

のが好い仕合せだ、お父様に然う言つてくれ。」

義郎は息をはずませて返事はしなかつた、邦子に手を曳れた義夫は、泣き出しさうに人々の顔を見較べてゐる。

「サア、邦子。」と、子爵は千枝子の手を曳いて、夫人と共に歩るき出した「邦子！。」と、又鋭く呼ぶ。

「はい。」

邦子は言ひたい一言も口には出ず、義夫の手を放して、急き立てる父の方へ行つた、それを見送つた義夫の眼には、涙が一杯溜つたゐた。

「お兄上様！。」

「義夫！」と、義郎は思はず手を固く取つた、熱い涙がハラ〳〵と落ちるのである。

「オイ君、如何したんだ。」と、大谷は妙な顔をして近付いて顔を覗いた。

（十二）

義郎は強く唇を嚙んで、差し俛首いてゐるのである、大谷に覗かれて、拗戻るやうに脊後を向ける。

大谷は輕く肩を敲いて「オイ〳〵、如何したんだね。」

「濟まないが君、僕は、今日は歸る。」と、義郎は漸やく顔を上げた。

「何故！」と、大谷は眉を顰めて「今のは君、所謂君の未來の妻たる、邦子さんを始め、親町家の方々ぢやないか、子爵は君を侮辱したかね。」

「それは、君、聞いてくれ給ふな。」

「何故？、男の癖にベソ〳〵泣いたりするなよ、見つともないぢやないか、定めし子爵も君を發憤させるために言つたのだらう、大いに活動して驚かしてやれ。」

「君、僕は殘念だ腸を斷たれるやうだよ。」と、義郎は思はず大谷の手を握つてバラ〳〵と又涙を落した。

「子爵は何と云つた。」

大谷も遂釣り込まれて、急き込んで訊いた。

「姉川家とは、今後一切絶縁すると云つた、僕一個人に就いてぢやないのだ、僕は口惜しい、僕は殘念だ。」

「ナニ絶縁する。」と、大谷も唇を嚙んだ「フーム、不人情な奴だ、冷やかな奴だ、情もない操もない冷血漢だ、好し、それなら屑く絶縁してやれ、華族なんて言ふ奴は、情よりも義理よりも、名聞を重じてゐる因襲的動物だ、大いに活動して見返してやれ、ナアニ、大にやれ。」と、大谷は自分の事のやうに力を入れて齒を喰ひ縛つた。

「大谷君。」

「ウムやれ、大にやつてくれ。」

「僕は、感、感謝する。」

「感謝より發憤してくれ、奮勵一番大に成功してくれ。」

「ウム、最う東京にはゐない、內地にやゐない、屹度、屹度成功して見せる。」

「好く言つた。三月廿七日を決して忘れるな。」

「忘れんとしても一生忘られるものか、僕の苦悶は解決した、不孝のやうだが決心した。」

「好く決心した、有難い。」と、大谷は頭を下げぬばかりに言つた。

「ナアニ、ナアニ、僕は最う、强い男になつたんだ。」と、義郎は顏を頰照らせ

て拳を握り、囈語のやうに呟いた。

「偉い、それでこそ前途ある青年だ、大に怒れ〳〵、怒つて意地にも成功し給へ。」と、大谷は左なくとも、沸き返るほど無念に思つてゐる義郎へ、尻から喙くやうに油を差した「好し、さう定つたら博覧會は止さう、何處かで一杯飲まう……」義夫さん、君は詰らなかつたらうけれど、又連れて來るから、今日は止さう……。」

と、悲しさうに眼を濕ませて、二人を見較べてゐた義夫を見返つた。

「最う歸るのですか。」と、義夫は全く詰らなさうに言つた。

「さあ、姉川君、君の終生の怨みを遺した博覧會だ、早く行かう。」と、大谷は

義夫の手を取つて、無言のまゝ歩み出した義郎と駢んで、自動車を睨んで置いて歩を進めた、義夫だけは幾度か背後を振り返るのである。

「義夫さんには、全く詰らなかつたねへ、屹度また來ますよ」

義夫は氣のない顔で肯頭いた、まだ小供とは言つても、十五の小年である、親町の叔父さんの話も、我家の運命も知らぬ筈はない、小供は小供だけに、如何なる事かと氣を揉んでゐたのである。

三人は無言のまゝ、比較的早足に、往き來の人を縫ふて公園前へ出た。

「はて、何處が好からう、君は何が好きだつたつけねへ。」

「止めやう、莫迦々々しい。」

「何故、好いぢやないか、酒でも呑んで鬱を散じ給へ。」
「ナニ、酒で慰安を求めるなぞは、ほんの一時を救ふ手段である、僕は根本的に、根治しなきやならん、改造しなきやならん。」
「ウム、屹度だね。」
「大谷君、僕は決心した、無用の金を費す時ぢやない。」
「それも然うだ、では止さう、義夫さんだけに何か……。」と、大谷は四邊を見廻して、と或る洋菓子屋の方へ行く、
「君、止し給へ、君の尊い汗を持つて得た學資を、其麼ことで費やしちや不可ん。」と、義郎は早口に言つたが、大谷は返事もしないで菓子屋へ這入つた、そ

して、間もなく大きな袋を提げて來て、義夫の手に渡した。
「濟まんねへ。」
「ナニ、好いさ〳〵。」とまた連れ立つて廣小路の方へ歩みながら「で、君の決心を。是非聞うぢやないか。」
「無論君に相談したいんだ、直ぐ行くよ。」
「では歸つて待つてゐるから。」
「頼む、僕は君の言葉で蘇つたのだ、生れ變つたのだ、畜生、屹度成功して見せるぞ。」と、義夫にも聞へぬやうに、小聲ながら力を入れて言つた。

（十三）

牛込見附で電車を下りて、麹町の方へ行くと、右へ折れる横町に春日館といふ下宿屋がある。大谷幸藏は歸りに煎餅を買つて袋のまゝで提げて來た、一番と札を打つた四疊半が、卽ち大谷幸藏の部屋である。

机と本箱と釘に掛けた古洋服が目星しい財産、本箱に這入りきらない書籍が床の間に積み重ねてあるのも、無造作にはしてあるが、大谷に取つては寶である、新聞も擴げた、まゝ座布團も座つたまゝにしてあつた。

大谷は煎餅の袋を机に置いて、ドッかりと安座を据ゑた、其所へ娘が火を持つて來た。

「何所へ行つしつて？」

「海事博覽會へ行つたさ。」と、大谷は疲れ切つたやうに言つた。

「隨分人が出るつて言ひますねへ、今度のは面白いのですか。」

「何だか、入場らないから知らない。」

「まあ……行らつしたのぢやないのですか、隨分ねへ、行つたなんて。」

「前まで行つたのさ。」

「まあ……ホ、ホ。」と、下宿の娘は妙な顏をして大谷を見た。

大谷は其麼ことには氣が乘らぬやうに「最う幾時かね。」

「さあ、彼れ是れ一時ですわ。」

「道理でお腹が空いた、飯を食はしてくれ給へ。」

「まだなんですか……では……。」と、娘は出て行つた。

大谷は、煎餅の袋を破つて、飯が待ち遠しさうにバリ〳〵食ひ出した、姉川家の事でも思ひ出したと見へて「うき世だなア、全く、有爲天變とは好く言つたものだ。」と、感慨が溢れるやうに呟きながら食ひかけると、バリ〳〵止み間もなく、娘が膳を運んで來るまで食ひ續けてゐた。

「まあ、大變なお土産ですこと。」

「如何だ、食はんかね。」と、大谷は袋を投げ出した。

「イ、エ、私澤山……。」

「何故？、遠慮をするない。」

「齒がこれですもの。」と、歸りかけた娘は齒を出して見せた。

「はゝゝは最うお婆さんだね。」

「まあ隨分だわ。」

「はゝゝは。」と、大谷は暢氣に笑つて、膳に向つた。

飯を食ひ終つても、また待つてゐる義郎は來なかつた、大谷は膳を椽頰へ出して、机の本を持つて横になつた、明け擴げた南の窓から暖い光線が部屋を斜に流れて、窓の外では隣家の庭木が、春の風に戰いでゐる。

「何をしてるんだらうなア。」と、急性な彼は、暫らくすると恁う言つて煎餅を取つた、けれど義郎は來る樣子もない、事に依ると出られなくなつたのか、と思つて見たり、或は彼の事だから約束を違へるやうな事はあるまいと信じたり兎角して四時頃まで横になつてゐたが、偶と大谷といふ聲が耳に這入つたので來たかな……と耳を澄ませてゐると、二階へ上つて來る跫音、それは案の如く姉川義郎であつた。

「ヤア、來たね。」と、大谷は彈ね起きた。

「寢てゐたのか。」

「ナアニ、退窟だから轉がつてゐたのだ、まあ座り給へ、煎餅でも食はんか。」

大谷幸藏は、姉川家が轉居して、たつた一人の親友の安否が解らなかつたので、絶へて訪ねる人もなく、淋しい生活をしてゐたが、漸やく義郎に逢ふ事が出來たので、昨日明日は生れ變つたやうに心が豐になつてゐた、下宿屋の娘さへ妙に思つた程である。

「飯はやつたかね。」

「食つて來たんだ。」

「然うか、好く來てくれた。」と嬉しさうに顏を瞶めて「時に、君の決心を聞ふぢやないか。」

「話す、聞いてくれ大谷君、」

「ウム、まあ煎餅でも食ひながら話してくれ。」
「實はねへ、僕は滿州へ行きたいと思つてゐるんだ。」
「……好からう、僕も大に賛成だ。」
「此考へは以前から持つてゐたんだが、父はあの通り頑固者だし、妹や弟はゐるしね、僕が行くとすれば、後が如何なるかと思つて、實は躊躇してゐたんだ、それに父は到底許すまいから、行くとすれば默つて行かなきやならない。」
「無論だねへ。」
「すると、僕の手では旅費を作る事が出來ない、」
「其麼ものは如何にでもなるさ。」

「所が、目下の境遇としては容易ちやないんだ、と云つて、此儘東京にゐた所が、父の事業を助ける譯には行かず、却つて手足纏ひになるばかり、親類には捨てられ戀人には捨てられ、同じ東京の地を踏むのも心苦しい、心外だ、で、僕は濟まん事だが、姉川家に傳つた此名幅を賣つて、滿州へ行つて鑛山學を實地に研究して來る積りだ、あわ好くば該地で鑛山事業を經營したら、成功出來ないものでもないと思つてね。」
「さうさ、要は君の決心にあるんだ、」
「假令成功しないまでも、父の事業を助けるには充分だらうと思ふ。」
「實は、それを僕から奬めたいと思つてゐたんだ、奬めたのでは効力がないが

君が心からさう決心したのなら、恁麽に好い事はない、大にやつてくれ、三月廿七日を忘れないでやつてくれ、旅費位は僕が如何にかする、それは送り返へしてやり給へ。」

「ナニ、君の學資を借りては濟まん。」

「莫迦を言へ、それは後に殘つた者の兵糧だ、親兄弟の糧が減じては好くない僕に任せてくれ、其變り、大谷幸藏が淋しく君の成功を待つてゐる事を忘れてくれ給ふな。」

「大谷君、僕は大いに感謝する、萬望、後の事は賴むよ。」

「後は心配するな、大谷幸藏が命に替へても屹度君には心配させん。」

「有難う。」と、義郎は目を霑ませて感謝した。」

「で、何日出立するね。」

「實は君、僕は最う家へ歸らん積りで出て來たんだよ。」

「エ、、そいつあ少時早いぢやないか。」

「一旦斯う決心したら、一時間だつて君、僕として猶豫して居られんぢやないか……」

「さうだらう、よく決心してくれた。」

「然し君、妙なものだねへ、僕が來やうとすると、義夫の奴がね、虫が知らせたと見へて、一緒に連れて行つてくれつて、莫迦に後を追つてね……」

義郎の眼からは涙が落ちた「君、僕は屹度成功するよ、」と、呼吸をはずませて言つた。

「ウム、石に嚙り付いても成功してくれ、」と、大谷は拳を握つて言つた「よしそれぢや、恁麼机だの本だのを賣つて了をふ、少しでも旅費は多い方が好いからね。」

「イヤ、それぢや君僕が濟まん、賴むから是れを賣つてくれ給ふな。」

「心配するな、何にもなくつても大谷幸藏は死やせん、目障りになる物を賣拂つて、廣々とした所で一杯飲うぢやないか、君の成功を祝さうぢやないか。」と大谷は立ち上つた。

何所かで淋しい飴屋の喇叭が、暖かい二人の友情を羨むやうに、孤獨の果敢なさを四邊に響かせた。

（十四）

表の戸は昨夜のまゝに辛張棒が嵌めてなかつた、遂ひ寢込んで歸つたのも知らなかつたのだと思つてゐたが、覺へのある義郎の下駄はない、吉野はサテは……と愈々胸を躍らせて、二階へ駈け上つて見たが、義郎の寢床は昨夜敷いて置いたまゝである。

「まあ、如何なすつたのだらう。」と、吐胸を吐いて呟いた、大谷さんの所へ宿

つたのか、それとも……それにしても、何とか知らせがありさうの物だ、今まで且つてない不謹慎、對手は大谷さんだから、默つて置かせる筈はないが、或は歸途に變つた事でもあつたのではあるまいか、義夫の話しでは親町の叔父さんや、邦子さんに逢つて、冷たい言葉をかけられたといふ事だから、もしや……と、吉野は心を千々に心配しながらも、何となく今にも歸つて來るやうに思はれたので、又癇癖の父に告げて、怒らせては好くないと、そのまゝ昨夜仕掛けて置いた竈を燃し付けた。

けれど、お飯が出來ても、父の義興や義夫が起きても歸つて來なかつた、お膳を出して朝飯の支度が出來ても、義郎の顏は見へなかつた。

「義郎は如何したのぢや。」と、遂に義興は訊いた、吉野は自分が叱られでもするやうに身を冷やりとさせて、

「はい。」と、答へるのみであつた。

「如何したのぢや。」と、義興は猶ほ鋭く言つた。

「僕が、呼んで來ませうか。」と、義夫は常のやうに、二階にゐる事と思つて、やをら立ちかけた。

「好いのよ、義夫さん、お兄上樣は、昨夜からお歸りがありませんの。」と、吉野はオド〳〵して、僅かに義興の顏を見た。

「ナニ、昨夜から歸らん？」

「はい、餘りお歸りが遲いやうでしたから、表を掛けないで寢ましたのに、お歸りがありませんの。」

「何處へ行くと言つて出たのぢや。」

「アノ、何家とも有仰いませんでしたけれど、大谷さんの所だらうつて、義夫さんが言つてゐましたから、よもや……」

「大谷？、ウム彼の無賴漢書生か、彼麼者の所へ行くのが第一好くない、默つて家を明けるとは怪しからん奴ぢや。」と、義興は目の色まで更へた「一體彼奴の家は何所だ。」

「好く知りませんけど、何でも麹町とか……ねへ義夫さん。」

「エ、、麹町ですつて。」

「麹町の何所だ。」

「何町だか……忘れちやつた。」と、義夫は仔細らしく首を傾げて、猶ほも考へ續けた。

「好し、何にしても不埒な奴ぢや。」と、義興は以つての外の憤りである、近頃の不如意に、氣がムカ〳〵してゐる時だから、彼の性分としては無理のない所である、飯を盛れと、茶碗の出し方までも穩やかでなかつた。

「親町の叔父樣や、邦子さんにお逢ひになつたつて事ですから、もしや……。」と、吉野は殊更に不安さうに言つた、父の怒りを、幾分でも同情と不安に誘ふ

との下心、尤も、事實に於ても吉野はそれを危ぶんでゐたのである。

「ウム……。」と、案の如く義興は不安の色を現はした、姉川家と絶縁すると言つた親町子爵の傳言は、義郎から詳しく聞いてゐたのである、嗟此侮辱！此無念!!　果してこれは誰の罪であらうか……と、それを考へぬほど義興は馬鹿ではなかつた、然し、皆自分の罪だと頭を屈めるほど氣の弱い男でもなかつた。

「フーム。」、と眼を嗔らして又迂鳴つた「嗟金が欲しい、金が欲しい。」

義興は慌てゝ味もない飯を嚥み込んで、フイと立ち上つた、如何するのかと吉野も義夫も、不安さうに見てゐると、柱に懸けてあつた外出の羽織を引かけた。

「お父様、何方へ？、」と、吉野は堪り兼ねたやうに訊いた。

けれど、義興は返辭もせず次の間へ出た「お父様……、」と、吉野はハラ〳〵して跡を追ふた。

「エ、、打ちやつとけ。」と、義興は又座敷へ返へつて、擡乎腰を卸した、流石力に思ふ義郎が歸らぬので、昨日の話を思ひ合せて、疑としてはゐられなかつたのである。

吉野も父の態度を見るに付け、兄の身の上が安じられて目を連瞬いた。

義興は太い溜息を洩してゐる。

「お兄上様は、親町の叔父様に、彼麼ことを言はれたから、屹度怒つて、歸つ

て來ないんですよ、大谷さんも怒つてゐたつけ、畜生だつて。」と、義夫も口惜しさうに、姉の顔を見ながら言つた。

「それでは愈々……、」と、吉野は終に袂を顔に押し當てた。

「姉川さん郵便！　郵便!!、」と、表で吐鳴る聲がした。

吉野は胸を躍らせて立ち上つて、間もなく細長い小包を持つて來た、義興は默つて受取つて、封を切つて驚いた。

「オヽ、これは喜蟬の軸だ、フーム、」と、怒りに手先を顫はせながら、軸に卷いてあつた手紙を擴げた。

それは——不孝ながら家出をするが、一二ヶ年の内には、屹度鑛山事業の智

識を得て歸るから、歸る日を待つてゐて下さい——と書いた義郎の手紙であつた。

「ア、、神に捨てられ、世に捨てられ、親類には絶縁され、力と思ふ兒にまで捨てられたのか……」

義興は骨太い手で頭髪をムヅと攫み、丁度鬼界島に流された、俊寛僧都が眦を裂いて六波羅を睨んだやうに、あらぬ方を睨み詰めた。

（十五）

學力から言つても年齢から見ても、義郎は姉川家の力であつた、再び事業に

取り掛るとしたら、義郎を當面に立たせやうと、義興は私かに胸中に描いてゐた、所が、その義郎が家出して、後に殘つたのは手足纏なればといつて、決して力にならない少年と娘、義興の落膽は一通りではなかつた、今まで一心に事業に熱中して、策を講じてゐた心も、殆んど自棄の境に落ちて、凡てを投げ出したかつた、けれど、彼の理性はそれさへ許さない、重い〳〵責任を打ち捨て、置く事は出來ない、親戚に對する無念、社會に對する恥辱を、その儘にして置く事は出來ない、と悟つた彼は氣も狂はんばかりに苦悶した、煩悶した、そして、

「嗟！　金が欲しい。」と、叫ばざるを得なかつた。

斯うした父の苦悶を、傍目に見る吉野も、義夫も堪へがたい苦痛であつた、事業に正氣を失つて、家庭の事なぞには見向きもしない父を、力とは出來なかつた、又相談に乘れる程小かい事に智識はなかつた、といふのも、金の中へ產れて六十年間、未だ且つて考へた事もない貧民になり下つたのであるから、思へば無理もない事である、それかと言つて、日々の生活に就いて、義郎が一々相談に乘つた譯ではないが、春秋に富んだ彼は、吉野のためには杖とも柱とも思はれたのである。

その杖とも柱とも、一家の者に信頼せられた義郎が、急に姿を晦迹したのだから、義興にせよ吉野にせよ、心細く思ふのは無理もない、さなくとも不安と

危惧に鎖された姉川家が、一層不安に包まれたのである。頑固一徹の義興さへ霊魂を打ち込んでゐる事業を投げ出さうとした位で、吉野が前途を危惧した程度は大略察せられるであらう。

此不安に襲はれた家庭――うき世の風が何所からともなく家中を吹き荒すやうな家庭へ、兄の様子を聞きたいと思つてゐたところへ、大谷幸蔵が、羨ましい程暢氣な顔で訪れた。

兄の一番親しかつた友達だけれども、自分とはこれ程ではあるまいと思ふほど、吉野は懐しく嬉しく心強く思つたのである、何物にも侵され難い、ビクともしない男性的の底力ある態度が、吉野の目には殊更羨ましく思はれたのであ

る。

父義興は朝のうち漂然と出たばかりで、未だ歸つて來なかつたので、吉野は取り敢へず茶の間兼用の座敷へ通す事にした。

大谷さん／＼。」と、義夫も嬉しさうに手に蚤み付いて、上り口から座敷へ誘ふた「詰らなかつたわ、先日は――、」と、怨みがましく言ふ。

「はゝゝはぢや今日は、本統に連れて行うかね。」

「エ、、連れてつて下さいよ。」と、義夫は大谷の巌丈な指を、二本づゝ兩手で攫んで、引き裂くやうにしながら言つた。

「義夫さん、其麼ことを有仰るものぢやなくつてよ、失敬ぢやなくつて――」

吉野は慌たゞしく火鉢の火を掻き立て、客席を造りながら窘めるやうに言つた「さあ、萬望此方へ。」と、招じる。

「好いんですよ、ねへ大谷さん。」

「然う言ふ約束をしたつけねへ、ぢや連れて行きませう。」と、大谷は笑ひながら座に就いた。

「まあ義夫さんは、隨分ですよ。」と、吉野は睨めるやうにした。

義夫はその姉の顏を一寸見て、急に思ひ出したやうに「ねへ大谷さん、家のお兄上樣は、大谷さんの所へ行きましたか。」

「ア、來た、如何したね。」

「然う？、家へは昨日出たつきり歸つて來ないんですよ。」と、悲し氣に訴へるのである。

大谷は何と答へて好いか解らぬと思つてか、默つて吉野と義郎の顏を見較べた。

「貴郎は、御承知ぢやございませんか知ら？、」

吉野は大谷の顏色を讀ふとするやうにして、遠慮がちに尋ねた。

「エ、、知つてるやうな、知らぬやうなんですがね、」と、大谷は咄嗟に言葉を濁したが、餘り秘密にして心配させるのも氣の毒だと思ひ返して「然し、心配しちや不可ませんよ、姉川君は、御嚴父の事業を助ける積りで、鑛山事業の研

究に行つたのですから、あの儘此家にゐた所で、到底事業を助ける事は出來ませんからねへ、素人ばかりが寄つて集つてやつても、決して成功するものぢやありません、それよりは、一時は不孝かも知れませんが、充分實地に研究して來れば、屹度御嚴父のお力にもなりませう、又其道に充分智識があれば、資本家を求めるにも容易でせう、夫れに目を付けて、決然として家を去つた義郎君の行爲は、徹底的です、眞劍です、これで無くちや、決して事業は成功しない令孃、心配しちや不可ませんぞ、義郎君の歸りを待つてお出でなさい、僕は義郎君の行動に感心しとるです、屹度近い將來に於て、姉川家は義郎君に依つて再興されるでせう……、」

と、大谷は熱心に釋き聞かせた。

「はあ。」、と吉野は頭を屈めた、成程さう聞いて見ると道理である、今まで闇路を彷徊うてゐるやうに思つてゐた生活に、前途の光明が見へた、希望が出來た、――兄が再び歸つて來たら――といふ、空想でない、手寄とすべき力が出來た。

「御嚴父も、其積りで義郎君の歸りを待つてゐらつしやれば好いですがねへ。」

「如何もあの氣質ですから……」

「然しまあ、心配はありません。」と、大谷は輕快に言つて「時に義夫さん、君は、僕の行つてる學校へ來んかね、本を持つて來た、明日からでも好いから來

給へ。」と、新聞包を出す。

「まあ、御親切に……」

「嬉しいねへ、僕明日から行きますよ。」

「手續はしてあるんですから、令嬢是非寄來して下さいよ。」

「有難りございます。」と、吉野は思ひ入つて感謝した。

ガラ〳〵と、表の格子の明いた音がした、思はず皆聞耳を立てた。

（十六）

吉野は急いで立つて行つた、上り口の障子を手荒く開けて、這入つて來たの

は父の義輿であつた、ムッチリした顏容で、言をもいはず茶の中折を吉野に渡して、其儘座敷へ這入つた。

大谷幸藏は居住居を直して「ヤア、お歸りでしたか、留守中にお邪魔をして居ります。」

「何しに來たのぢや。」と、義輿は突劍呑に言つて、吉野が敷き直した座布團へムッと座つた、貧乏はしても斯うした態度だけは貴族的であつた、髯も永らく剃らぬと見へて、折角の美髯も臺なしである、お負けに色こそ變つて居れ、貧乏して始めて着る習慣になつたメリヤスの襯衣も汚れて、大道易者かそれとも大人乞食と言ひたい格好、

大谷幸藏は、流石に返辭に困つた、怫然とした心を無理に抑へて、斯うもあらうと顏を瞶めて惘れ返へつた。

吉野はホロ〳〵して「まあお父上樣……、」と、遮るやうに言つた「大谷さんが、恁麼に、義夫さんに御本を下すつたのですわ。」

「僕ね、お父上樣、明日から大谷さんの學校へ行つても好いねへ……行かして下さいな。」と、義夫は顏色を窺いながら言つた。

「ア、行け〳〵。」

「行つても好いの、嬉しい〳〵。」と、義夫は微笑して「僕、お兄上樣の机を借りるんだ。」と、貰つた本を大切さうに膝へ乘せた、年は十五ではあるが、遲產

れなのと育ちが育ちだけに、何所か小供〳〵々々した所があつた。

「お禮を有仰らないの。」

「大谷さん有難う。」

「ウント勉强して、一番にならなきや不可んですよ。」

「僕、此前だつて三番でしたよ、今度は屹度一番になつて見せる。」

「偉いねへ義夫さんは。」と、大谷は例日もながら愛嬌の好い對話をしてゐた。

けれどそれが義與の耳には這入らぬかのやう、木訥りして何事か考へてゐたが、不意に思ひ出したやうに「お前は家の義郎のゐる所を知つてゐるだらう。」と、怖い目で睨んだ。

大谷は、何て頑固な爺たらうと、愈々悶れて「知らんです、今令嬢からも聞きましたが、要するに義郎君の家出は、姉川家に取つては非常な吉祥だと思ひます、貴君が事業に成功する瑞祥だと思ひます。」

「ナニ瑞祥だ？、」と、義郎は益々眼を瞋らせて「不埒な事を言ふな、貴様も姉川家を呪ふ積りか、此義郎を呪ふ積りか、然ういふからには、貴様が義郎に智慧を付けて家出させたに違ひない、何所へ遣つた、連れて來い、」と、物狂しきまでに怒つた。

大谷は義郎が熱すれば熱するだけ、愈々落着き拂つて「はゝゝは子を見る事親に如ず、貴君は夫れほど義郎君を馬鹿だと思つてゐますか、他人の口の端に

乘つて、盲動するやうな無意志な男と思つてゐますか、」と、壓へ付けるやうに言つて「然うぢやありますまい、貴君の事業を助けるために、誠意を以つて、決然と家を去つて、後日の成功を期するといふ事は、姉川家に取つても、貴君に取つても、大いに祝福すべき事ぢやありませんか、歡喜すべき事ぢやありませんか。」

「年老つた親を捨て、妹や弟を捨てゝ、家出したのが祝福すべき事ぢや、歡喜すべき事ぢや、惡魔奴、不埒者奴。」

「まあ、お父様……、」と、吉野はハラ〳〵してゐた。

「貴君はまだ義郎君の心持が解りませんか、貴君が熱中した事業を、誠意を以

つて助けやうとする心持が解りませんか、所謂箕裘を繼いで奮鬪せんとする健氣な心持が解りませんか。」

「親兄弟が路頭に迷ふんだ、姉川家が全滅するんだ、私や世にも神にも捨てられたんだ、力に思ふ子にまで捨てられたんだ、貴樣が捨てさせたに違ひない、惡魔奴、かゝ歸へれッ。」と、膝の皺をムヅと攫んで、全身をビリ／＼顫はせてゐる、癇の强い者の常として、極度に熱すると殆んど別人の如く正氣の沙汰とは思はれなかつた。

「其麼ことを……お父上樣……、」と、吉野は一人氣を採むのであつた、義夫は悲しさうに、眤と二人を見較べてゐる。

「解りませんか、解らなければ仕方がない、事實になつて顯れるのを待つのですねへ、其内には義郎君も歸つて來ませう、まあ心を落ち着けて好く考へて御覽なさい……。」

と、大谷は寧ろ愍れむやうに、平然として言つた。

「エ、かへれと言つたら、かゝ歸らんか。」

「歸ります、だが、餘り野心を出しちや不可んですぞ、決して成功を急いぢや不可んですぞ、悠々と義郎君が歸るのを待つておゐでなさい。」

「默れ！餘計な心配をするな、貴樣まで私を侮辱するか、嗟、此義興は零落れ果てた、無念だ、殘念だ、歸れ／＼。」

「歸りますとも、お邪魔をしました。」

大谷は餘り物が解らな過ぎると、少し氣色喰んで立ち上つた。

（十七）

「お父上樣……貴郎もまあ……、」と、流石世馴れぬ吉野は、如何取りなして可いのか解らなかつた、眼を霑ませて立つにも立たれず、座るにも座つてゐられなかつた。

「決して心配なさるな、」と、大谷は目で制して座敷を出た。

「萬望お許し下さいませ、お父樣は、少し氣に入らぬ事があると、すぐ……、」

と、吉野は追ひ縋るやうにしつゝ涙を拭つた。

「エ、エ、心配しちや不可ませんよ、間の惡い時は、少しの事でも癪に障るものです、僕は何とも思つてゐやせん、只だ、あゝ言ふ風では貴嬢が嘸ぞ苦勞せられるだらうと思つてねへ、實にお氣の毒に堪へませんよ。」

吉野は唯々涙に咽ぶのみで、一言も口には出なかつた。

「大谷さん。」

義夫も跡を追ふて來てゐた、心細さうな聲で呼びかけて「僕は最う、學校へ行つちや、不可ないのですか。」と、さも失望したらしく訊く、

「不可ん事はない、明日から來給へ。」

「エ、、」義夫は肯頭いた、

「令嬢、屹度寄來して下さいよ。」

「有難うございます。」

「では……成可くお父様を慰めて上げて下さい、大分誤解してゐらつしやるやうですから、僕は却つてお氣の毒に堪へんです。」

「はい、」と、吉野はまた涙をハラ〳〵と落した、憂鬱な心細い生活をしてゐる者だけに、一層涙脆いのである、父の失禮な言葉も咎めずに勦つてくれる美しい眞心、それを聞いた吉野は、言葉よりも先づ涙が流れ出るのを止め得なかつたのであつた。

「左様なら。」と、大谷はフイと表へ出て了つた、餘り呆氣なく歸つたので、口でこそ彼言つてるやうなものゝ、心の内では父の言葉を怒つてゐるのではあるまいか——と、只だ兄の親友とのみで、深く大谷を解してゐない吉野は、斯うも疑つて見たのである。

「ア、如何したら宜いのでせうねへ。」と、考へると亦も不安の雲が胸を鎖して

「いつそ死んで了つたら……、」と、まで思ひ詰め、見へない大谷を見送りながら、張り裂けるやうに込み揚げて來る悲しさが、涙となつて滂沱ちるのであつた。

「お姉上様、如何したのです。」と、義夫は心配さうに、姉の胸を量りかねて顔

を呪いた。

「義夫さん。」と、吉野は肩に手をかけて「妾、如何もしないことよ。」

「だつて……、」と、眤と涙の顔を見上げて、言つては不可ない事のやうに口を噤んだ。

「貴郎はねへ、明日から大谷さんの學校へ上つて、大谷さんに宜くお詫びをして頂戴よ。」

「エ、、」と、義夫は肯頭いて見せた「大谷さんは怒つてるか知ら、」

「怒つてらつしやるかも知れないから、宜くお詫びをして頂戴よ、ねへ。」

「エ、、僕、困つちやつたなア。」と、義夫は悄氣返へる。

「困りやしないわ、宜くお詫びをすれば宜いのよ。」

吉野は自分でも、詫びをすれば大谷が免して呉れると信じて、やうやく涙を納めて座敷へ這入つた、父は佶屈しい顔で瞥見と睨らんで、

「吉野。」と、猶ほも鋭く睨み詰めた。

「はい。」

「貴樣は、不都合をしちやゐないだらうのう、不都合をする積りちやあるまいだらうのう。」

「はい、決して……、」と、吉野はその意味が解らなかつた、引き寄せた仕事を其儘にして、父の顔を見守つた、義夫は貰つた本を無心で見てゐた。

「私の目を盗んで、情人でも拵へると承知せんぞ。」

「エ、ッ！。」と、吉野は身も心も戰慄かせて、晴天に霹靂かと驚いた。

「私の留守中に、彼麼奴を上げる事はならん、私は彼奴が大嫌いだ、若し今後來たら、早速追ひ返へして了へ。」

義興は全く大谷を好かなかつた、貴族的な、傲岸な彼は、餘り接した事はなかつたが、所謂虫が好かぬとでも言ふのであらうか、顔を見るのも好まぬ位であつた、そして目下のやうに零落すると、殊更大谷の磊落な態度が自分を侮つてゐるやうに思はれて、一層嫌やになつたのである。

「はい。」と、吉野は從順に斯う言ふより外、言ふべき言葉を知らなかつた。

「屹度吩付けたぞ。」

「はい。」と、從順に言つたものゝ、吉野の胸中には非常に苦悶が起つたのである、如何やらお兄上様の御様子を宜く知つてゐられるやうな様子と言ひ、あの親切なお情を仇にして、其麼ことは出來ませんわ――と、言ひたい心を抑へてゐるだけ、如何して父と大谷の間を融和したものかと苦慮したのである、吉野は餘り頭腦がヅキ〳〵するので、考へを捨てやう〳〵としながらも、矢張り其事をのみ心配してゐた。

「アゝ實に殘念だ。」

義興は何時までも〳〵、疑と考へ込んでゐたが突然、斯う齒を喰ひ縛つて呟

いた、本を熱心に見てゐた義夫も、洗濯物を縫つてゐた吉野も、魘されてゐるやうな、義興の顔を盗見目に見た。

信憑ない姉川家へ、目に見へない惡魔が入り込んで、付け入る隙を窺つてゐるやうに思はれた、侵さなければ止まない執拗な惡魔の手！　然かも充分に付け入るべき隙のある事を思へば、不安と恐怖が胸に滿ちて、吉野は父の嘆聲を聞きながら考へるに附け思ふにつけ、自然に涙が流れ出るのを止め兼ねてゐたのであつた。

人の心も浮き立つ春宵に近い街を、とうふ……イと喇叭を吹いて通るのが微かに聞えた。

（十八）

吉野は、夕餉の支度もそこ〳〵にして、親子三人が淋しい膳に對つた、ところへ、

「御免下さい。」

表の格子を手荒く明けて訪ふ者がある、吉野が箸を措いて立つて行くと、それは差配のお爺さんが來たのであつた。

「入來つしやいませ。」

「如何ぢやな、今日は――」

「はい。」と、吉野はモジ〳〵して「誠に濟みませんけれど……萬望、今暫時。」と、聞えぬ程小聲で斷れ〳〵に言つた。

「又かね、困るぢやないか、然う來る月も來る月も入れてくれないぢや――、最う是れで三月滯つてゐるんだからねへ。」と、薄暗い外の明りで吉野の顏を尻目にした「何とかならんかね。」

「はい、如何も……。」

差配の爺は急に苛立たしく「主人は留守かね、お前さんぢや解らんから呼んどくれ。」

「はい、では一寸……。」と、吉野は其由を父に告げた。

義興は直ぐ出て來て「何ぢや？」と、立つたまゝぐつと睨み下した。

「何ぢやぢやない、家賃を入れて貰はにや困るぢやないか、敷金があるからまあ宜いと思つてゐたら、來る月も〳〵、一度だつて入れた事はない、私が家主に言ひやうがないぢやないか、今月は何でも彼でも入れてくれなきや困る。」と、義興の言ひ方が氣に入らなかつたと見へて、差配人は却々歸りさうにもしない。

「此方も困つてるんだ、金はないのぢや。」

「ぢや一體如何する積りだね。」

「如何するにも彼うするにも、ないのだから仕方がない、又其内にどうにかな

るだらう、それまで待つてをれ。」と、膠なく言つた。

今までの生活が生活だし、性格が傲岸不遜の義興だから、頼むなぞとは言へないので、殊更に尊大振つた譯ではないが、それを知らない差配人は、言のひ方を知らぬ奴だと額に青筋を浮かせて憤つた。

「お前さんは、始めつから家賃を踏み仆す積りで此家へ這入つたんぢやな、惡い對手ぢや、私も永年差配をしてゐるけれど、お前さんのやうな者に逢つた事がない、早速立ち退いて貰ひませう。」

「移轉するには猶金が要る、さう言ふ事を言はずに最少し待つてをれ。」

「チエ、立退料でも取らうてんだね、よし、其方で其氣なら立退命令をしてやるからな、ゐられるまでゐるが宜い、惘れ返つて言がいへない。」

「それも止むを得ん、待たれなきや勝手にするが宜い。」と、義興は意地にも斯う言はなければならなかつた。

先刻から氣を揉んで、口を出したさうに膝を衝いてゐた吉野は、

「お父上様、萬望お願ひして暫らく待つて頂くやうにして下さいまし。」と、前掛を顔に押しあてた、此家を敲き出されて、又何所に住居う事が出來やうか、今日か明日かと待つ兄の便を待つ甲斐もなく、當もない浮浪の一家、もう斯うなつては乞食となり下る外はない、彼を思ひ是を思へば、まだ斯うして夜露が凌がれるのは幸福、此先の奈落の底!! 想像も及ばない倫落の淵!!　思つてさへ

吉野は活きたる心はしなかつた。

「待つてくれたら當があるのか。」と、義興は他人事のやうに言つた。

「何を賣つても……何とかなりますわ。」と、吉野は涙を拭つて「ねへ貴郎萬望暫時お待ちなすつて下さいまし。」

「ア、駄目だね、さう言ふ都合ぢや駄目だ、此先が安じられる、お前さん方は何所か……下谷萬年町か、四谷の鮫が橋邊りへ行くが宜い、兎に角此家は立つて貰ふから、然う思つてくれ。」

と、差配人は帽子を被つて表へ出た。

「萬望……お願ひでございます。」

吉野は追ひ縋るやうに言つたが、差配人は手荒く格子を閉めて、返辭もなく歸つて去つた。

「お父様、如何したら可いのでせう。」と、吉野は聲を殺して泣き伏した、義興は言をも言はず、苦澁きつて奥へ這入つた。

「ア、金が欲しい。」と、瞠かり腰を卸す。

義夫は姉を氣遣ふて、次ぎの間へ出て來て泣き伏した吉野に手を取つて「お姉上様、如何したんです……。」

吉野は暫らく無言でゐたが、ット義夫の手を握り締めて「義夫さん!。」

「如何したんですか。」

「吁！　お父上様は何故あゝなんでせうねへ。」熱い涙が頰を流れた。

（十九）

さらでだに不眠症にかゝつてゐた吉野は、昨夜は家の心配で殆んど一睡もしなかつた、頭腦がヅキ〳〵して、鉛を注ぎ込まれたほど重たかつたが、それでも義夫の學校へ行く支度をしてやらなきやならないので、常よりも早く床を離れて、朝餐の支度をした。

義夫も平常よりは早く起きて來て「僕、學校へ行つても宜いんですか。」と、心元なさうに訊いた。

「行らつしやい、折角大谷さんが御親切に言つて下すつたのですから……。」

「だつて、僕が行くと、お姉上様が困りやしないか知ら。」と、顏色を窺ふやうにして「困るんなら、僕行かなくつても宜いんです。」

「困りやしないわ、大谷さんが全部手續をして下すつたのですから、行かないと惡いから行つしやい。」と、吉野は何も彼も手一つで精悍しく立ち働いて、兎に角朝飯を濟ませた。

「お辨當は……？」と、義夫は思ひ付いて「不要いのでせうか。」

「然うねへ……。」吉野は其所まで氣が付かなかつたのである。

「アゝ宜い、僕一度位食べなくつても宜い。」

「其麼ことをしては、身體に障るわ、お金を上げますから、今日だけ何か買つて行つしやい……、ア、お姉樣が其所まで送つて行つて、麵麭でも買つて上げますわ。」

「然う、ぢや僕鞄を持つて來ますからねへ。」

「時間割は解つてゝ。」

「エ、、大谷さんが、雜記帳へ書いてつてくれたの。」と、義夫は二階へ走り上つて、ズックの鞄を持つて來た、吉野は膳を片付けて、汚物は勝手へ出し、前掛を外して衣紋を繕ろひ、

「お父上樣、一寸義夫さんを送つて參ります。」と、父に斷つて表へ出た、義興

は義夫が學校へ行うが行くまいが、其麼ことは無頓着なもので、費用が如何なるのかとも考へてはゐない、子供の時には勉強しなければならぬもの、行けるなら如何ともして行けと、親としては實に無責任であつたが、一面から見ると彼の貴族的な性質が顯はれてゐるのである。

「大谷さんは、最う行つてるか知ら……、」

と、義夫は憧憬するやうに言つた。

「大谷さんなんて言ふのぢやありませんわ、先生て言ふのよ。」

「先生て、何だか可笑しいやうですねへ。」

「可笑しかあないわ、本統に先生ぢやなくつて。」

「先生は先生ですけれど、自家へ能く來るんですもの。」
「入來しやると先生ぢやないの、義夫さんは妙な理窟を言わねへ。」と、吉野は遂微笑して、
「先生に逢つたら、お父上樣の事を、能くお詫びして頂戴よ。」と、二人は話しながら富坂を春日町の方へ下つた。
すると、向ふから來る詰襟の服に古い中折を冠つた男、義夫はそれに氣が付くと、
「ア大谷さん……ぢやない、先生。」と、言ひ直した。
「まあ、お迎ひに來て下すつたのだわ。」と、吉野は憫れたやうに言つた。

大谷もそれと氣が付いたらしい、二人を見て笑いながら近付いて來る。
「今迎ひに行く所です、早やかつたですねへ……」
「有難うございます、種々とどうも……」
「義夫さん、愈々來てくれるね、まだ少し早いけれど、始めてだから早やいも宜からう、ぢや令嬢、貴嬢は最う此處でお歸り下さい、義夫さんは僕が預つて行きます。」
「萬望お願ひ申します……、」と、吉野は慇懃に頭を下げて、そして、今まで言をうと思つてゐた父の詫言を、遂ひ言ひ淀んでゐたが、やがて、
「それから……あの、昨日、父上が申し上げたこと、萬望惡く思し召さないで

下さいまし。」と、心からの謝意を述べた。

「あゝ彼れですか、はゝゝは未だ貴嬢はあれを氣にしてるんですか、僕なぞは最う疾くに忘れてゐた。」

「まあ……、」と、吉野は呆れるやうに言つた、何事も氣にしない暢氣な態度、少しも心配のない平和な様子、快濶な口調、吉野は羨ましいやうな、尊いやうな感じがしたのである。

「彼麼ことを心配しちや不可ませんよ、却つて損をして了いますぜ、幾等貴嬢が心配したからつて、心配のお殘額は差し上げられんですからねへ、結局心配損だはゝゝは。」と、快活に笑ふ。

吉野は何と挨拶をして宜いか解らなかつた、今にも死んで了いたいとまで苦悶してゐたのが、大谷の快活な言葉と暢氣な態度に接してからは、何時とはなしに苦悶も去り不安も解けて、氣も晴々しくなつてゐた、そして何となく力強く感じたのである。

「ちや、失敬します。」と、大谷は義夫の手を曳いて、春日町の方へ急いだ。

「ではどうぞお願ひ申します……。」

吉野は二人の後姿を厭きもせず、暫らく瞶めてゐたが、旋て元來た方へ取つて返し、右へ折れるべき所まで來ると、偶と思ひ付いたやうに其儘電車通りに沿ふて傳通院の方へ行つた。

外出した序に、牛天神へ參詣して、一家の幸福を祈らうと思つたのである、境内で遊んでゐた子守女なぞが、妙な顔をして見送るので、吉野は氣兼ねさうに神前に進み、それでも一心を籠めて額付いた、何所で何をしてゐるのか、想像さへ付かない兄の健康を祈り成功を祈り、一家の開運を祈つて、聊か氣が輕くなつたのを覺へた。

そして、父が佶屈い顔をして待つてゐるのを思ひ浮べつゝ、急ぎ足で歸りに就いた、仲町の寂寥した裏町から電車通りへ出ると、學生や勤人らしい往來が多かつた。と、

「お嬢さん！」と、不意に後方から聲を懸けたものがある。

（二十）

吉野は眞逆自分を呼びかけたのではあるまいと、何氣なく振り返へつて見ると、吾妻久四郎が早足に追ひ付くのであつた。

「何方へ行つしやいました。」と、久四郎は例の禿頭を輕く下げて會釋する、吉野も叮嚀に會釋を返へして、

「一寸其所まで……、」

「然うですか、隨分お早いではございませんか。」と、久四郎は通り一遍に言つて「お父様は？……最うお出掛けでしたか。」

「エ、、イ、エ、宅に居りますわ。」

「此二三日奔走に忙殺されて、遂お目に懸れませんでしたが、兄様からお便がございましたか？……不意に家出なさつたのぢや、後がお淋しいでせう。」と、久四郎は聊か同情を以つて言つた、暫らく訪ねて來なかつたが、義興が行くと見へて、姉川家の事を能く知つてゐた。

「はあ、」と、吉野は僅かに首肯いた。

「何の方面へ行かれたか、見當も付かないのですか、一ッ易でも立て、見たら何とか解りませうにねへ。」

「然うなんですけれど……」

話はこれで切れた、二人は砲兵工廠の塀に沿ふて、富坂の方へ行つた、すると、向ふから四十餘りの紳士が、澁い高貴の袷に、絞縮緬の兵子帶をグル〳〵卷きにして、肥滿と腹の膨れた、何うやら一癖ありさうな男が漂々とやつて來た。

久四郎はそれと見て會釋しながら近付いて「オヤ、これは〳〵、お早うございますねへ。」と、叮重に頭を屈めた「君は……何所へ行くね？」と、紳士は瞥見と吉野を見て、不審さうに聞いた、此男は後藤頼平と言つて、近頃まで或金貸の手代をしてゐたのだが、メキ〳〵と金を拵へて、今では數十萬の資産があると言はれてゐる、斯う言ふ男に限つて、一方では褒め一方では貶されるのが

常で、一部の人からは非常な人物と稱せられてゐるが、他の一方からは實に人間ではないと擯斥せられてゐる男である。

「へゝゝへ相變らず貧乏忙しいので、例の奔走をやつて居ります。」と、久四郎は詰らなさうに言つた。

「却々熱心だねへ。」と、氣がない言ひやう、一寸話が切れかけたので、久四郎は話頭を替へ、

「貴君は何方へ……？」

「ナニ、漂々散歩さ、朝起きると、如何も一廻り散歩せんと飯が好味くない。」

「然うでございませうねへ、お身體には藥ですねへ、私共は貧乏で、年中歩き

ますが、藥りですよ。」と、下らない話をし出した。

早く歸らうと急いでゐた吉野は、手持無沙汰ではあり、父の事が氣にかゝつて堪らなかつた、折りもあらばと待つてゐたが、却々話は切れさうにもない、で思ひ切つて、

「あの、妾、少し急ぎますから……、」

と、吾妻に別れを告げた。

「さあ萬望……是れから奔走に出掛けますから、お父上樣に然う有仰つて下さいませ。」

「はい、承知いたしました。」

吉野は漸やく久四郎に別れて、急いで歩み去るのであつた。

後藤は瞬もせず吉野を見送つて「美い娘だねへ。」と、嘆息するやうに言ふ。

「へゝゝへ御意に叶ひましたか。」

「何處の娘だね。」

「それ、姉川家のお嬢さんですよ、まだ〳〵彼麼こつちやなかつたのですが、家が貧乏してからと言ふものは、お裝をせんのと、心配をするのとで、此頃は大邊痩れてゐらつしやるが、以前はねへ、先づ廣い東京にも、二人とない綺麗でしたぜ、お負けに優しいお方でねへ、好く出來たお嬢さんでがす。」

「然うらしいねへ、全く美人だ、あの痩れた所に又風情がある。」と、後藤頻平

は頻りに褒めそやして「あゝ言ふ美人を、不遇に泣かせて置くのは可愛想なものだ。」

「ぢや一ッ、救つて上げては如何です。」

「好いねへ……併し候補者も多からう……が何とか話が付くものなら、是非救ひたいものだ。」

「そりや大概私が引受けますよ、すると、例の話にも乗つて頂けませうか……姉川さんの事業に、出費して頂けませうか。」と、久四郎は段々眞劍になつて來た。

「出しても好い、好いが其變り私にも條件がある、先方で條件さへ履行してく

れや、ナアニ、五萬でも十萬でも屹度出してやる。」

「條件と有仰りますと。」

「さうさねへ、先づ私の方で充分鑛區を調査して、それから……。」と、言ひ惡くさうにして「まあ此所ちや話も出來ん、急ぐ用事がなければ、家へ寄つてくれ。」

「えゝ宜しうございますとも、如何せその事で奔走してゐるのですから……」

二人は傳通院前から、水道端へ下りる坂の中途にある、御影石造りの門内へ話しながら這入つた。

(二十一)

その日の夕方であつた、吉野が夕御飯の支度をしてゐると、吾妻久四郎が一杯機嫌で訪れた、義興は好い資本家でも見付つたのではあるまいかと、久四郎と聞くと自から迎へて座敷へ通した。

「如何ちやな、その後の樣子は……、」と、まだ座にも就かぬに斯う訊くのであつた。

「はい、大分面白い話がございますので……」

「然うか、そりや御苦勞ちやつた、まあ前へ寄れ。」

「はい。」と、久四郎は座布團ぐるみに前へ辷り出て「イヤ最う、朝から晩まで歩き詰めに奔走しまして、漸やく一人捕へました、這度は九分九厘まで成功でございます。」

「フム、それや手柄ぢやつた、事業が成り立つやうになつたら、充分禮はするぞ。」

義興の顏には、打つて變つた希望の光が輝いた。

「イヤ最う如何いたしまして、成立ちさへすれば、私も非常に助かりますので御前樣もお困りでございましたらうが、私共は大變困窮しまして、どうぞして一日も早く成立たせたいものだと、一生懸命に奔走しまして、辛つと見付けま

した。

「然うぢやらう、私も產れて始めて貧乏の味を知つたよ。」

「はい。」

「して、其資本家と言ふのは、一體誰ぢや。」

「はい、後藤頗平といふ方でございますが……、」と、久四郎は顏色を窺ひながら言つた。

「後藤頗平？聞いたやうな名ぢやが、何をする者ぢやな、矢張り實業家か。」

「然うでございますねへ、今の所は、別に何もして居らないやうでございますが、何でも餘程の資產家で、百萬位はあらうといふ事で、まあ有利な事業があ

ればそれへ投資をしやうといふ、資本家でございませう。」

「さうか、然う言ふ資産家なら大丈夫だが、はてな、慥かに私も知つてる筈ぢや。」と、義興は首を捻つて「ウム、知つとる〳〵、彼奴は高利貸ぢやないか。」

「はい、以前は高利貸もやつて居りましたが、今日では止めたやうでございます。」

「好く新聞で素破抜かれた、悪い奴ぢやないか、彼の後藤頌平なら、久四郎これや考へものだぞ。」

「イエ御前様、然う一外には言へません、新聞屋なんて言ふものは、幾等か攫ませば褒めるし、攫ませないと、隨分悪く言ふものでございましてな、世間の

噂なぞといふものは、如何も當にならんものでございまするよ。」

「そりや然うぢや。」と、義興は首肯いた。

「何しろ、金を出すだけで、經營は此方でやるのでございますから、事業の方に不都合はございません、又資本金も、年五分といふ低利で、五萬でも十萬でも貸せやうと言ふのでございますから、先づ這麽結構なことはないと思ひますが……、」

「フム、愈々出すかのう。」と、義興は疑はしさうに言つた。

「はい、出すには慥かに出します、其變り、先方に一ッ條件がございますのでそれさへ御前様が御承知になれば、直ぐにでも話は纏ります。」

「然うぢやらう、いづれ條件はあるぢやらう、一體如何いふ條件ぢやの。」

「はい、それが其、何でございまする、先方では、非常にお嬢様を懇望して居りますので。」と、久四郎は勝手の方にゐる吉野に、聞へぬやうに聲を潜めて言つた。

「吉野を？」と、流石に義興も驚いた。

久四郎は其顏色を眤と瞶めながら「はい、是非御承諾を得ませんと、如何も此事業は成り立ちませんので……、」

「一體後藤といふ奴は幾才だね。」

「四十三とか四とか申しました、一昨年でございましたか、奥様が亡くなられまして、まだ後添がございませんさうで……。是非お嬢様をと、頻りに懇望して居ります、此話さへ定りますれば、資金は因より、仕度金も五百や千は出すと申して居ります。」

「然うか……、」と、義興は凝と考へ込んだ。

「年は大分違ひますが、身賣奉公をするのと違つて、お嫁に行くのでございますから、此場合、是非一ッ御承諾が願ひたうございますが。」

「彼の男ではのう。」

「はい、世間では色々な事を申しますが、逢つて見ると、却々才物でございますよ、失禮でございますが、此儘世に埋れてゐるより、お嬢様が御幸福かと存

じます。」

「それも然うぢや、事業のためだでのう、一家のためだでのう。」

「左樣でございます。」

「やるとせうか。」

「はい、御承諾下さいますか、有難うございます、それで私も大きに助かります。」

久四郎は幾度も頭を屈めた、義興は勝手の方へ向ひ、

「吉野、まだ夕飯の支度は出來んのか、」

「はい、只今。」吉野の聲は潤んでゐた。

「吾妻と一緒に食るから、酒を少し買つて來い。」

「はい。」と、吉野は微かな返事をして、襷を外しながら這入つて來た「あのお酒は……、」

「一升ばかり賴んで來てくれ。」

「……あの前の借がございますから、持つて來ませんと思ひますけれど。」

「借は又拂つてやる。」と、義興は睨むやうにした。

久四郎は氣の毒さうに「イヤ御前樣、少し用事もございますから、何れ明日でもお伺ひいたしまする、先方へも返事をしてやらなきやなりませんで。」

「然うか、では、慥かに承知したと言つてくれ。」

「承知いたしました、今晩、これから寄りまして、明日でも支度金はお屆けいたします。」

久四郎は頭をペコ〳〵下げて辭し去つた、二階で勉强してゐた義夫は、それと知つて急ぎ足に下りて來た。

（二十二）

夕飯後に、義興は膝近く吉野を呼び付けた、そして、改まつた態度で「吉野お前も最う年頃ぢやで、相等の所があれば緣付かなければならんが、幸ひ久四郎が好い緣談を持ち込んで來たから、兎に角大體の話は定めて置いた、お前も

知つとるか知らんが、後藤頌平と言つて、却々資產家でな、私の事業に出資しても宜いといふことだから、家の爲めにもなり、お前の爲めにもなる事ぢや、其積りで居らんと不可んぞ……。」

と、義興は頭から抑へ付けるやうに言つた。

固より從順な吉野は、たゞ「はい。」とのみで、俛首いて顏を赤めた、先方が如何いふ男だらうとか、如何いふ家庭であらうとか、と、考へる餘裕はない、何れは來るべき運命ではあるが、今此困窮した家庭の中から、親を捨て兄弟を捨てゝ他家へ行くやうにならうとは、夢にも思つてはゐなかつた、餘りに突然であつた。

「お前が行きさへすれば、私の事業も成り立つんだ、今度といふ今度こそ、屹度成功させなきや置かん、明日にも結納を持つて來る筈ぢやから、其積りで居つてくれ。」と、義興は又念を押すやうに言つた、幾等事業に熱狂してゐるとは言へ、そこは親であるから、自分さへ固より進まない縁談、決して無理にやりたくはない、たゞ金の爲めに承諾したので、言はゞ犧牲にするのであるから、少しく心元なく思つたのである。

「はい。」と、吉野は益々俛首いたが、父の言葉を聞くに付け、小さい胸を痛めたが、漸く心を決した「妾、お兄上様がお歸りになるまで、このまゝでゐたいのですけれど……、」と、やつとの事で重い口を開いた。

「莫迦、彼麼、親兄弟を捨てた奴を、兄とは思ふな、兄といふことは一切ならんぞ。」と、義興は待ち設けたやうに吐鳴り付けた。

「はい。」と、吉野は心細い聲で言つた、心の奥には、美しい、懐かしい〳〵理想が潜んでゐて、如何かして父の心を飜へさせやうとしてゐたが、父の性質を酌み分けて居る吉野には、それを言ふ事は出來なかつた、假令又言つても、決してそれは用ゐられる筈はなかつたのである、元々義興は吉野の幸福とか、名譽とかは眼中にないので、只々金ばかりに轉んだのである。

「あゝ、これで私も安心した。」と、義興は伸々するやうに言つて「好く支度の事でも考へて置くが好い、相當に着物も調へにやなるまいでのう。」と、例日に

なく漂然と何所へか出て行つた。

吉野は父を送り出して、玄關に凝と立つてゐたが、譯もなく涙がハラ〳〵と流れた、先刻から父の言葉を聞いて姉の身の上を案じてゐた義夫は、

「お姉上樣。」と呼びかけて、姉の心を窺ふやうに、眤と顏を覗いた「お姉上樣はお嫁に行くんですか。」と、心配氣に聞いた。

「妾、行かないわ、行きたくないわ。」と、又一層涙が湧き出るのであつた「お父樣がねへ……、」

「お父樣が、お嫁に行かないと怒るんですねへ。」と、義夫は思案に餘るやうに

「僕、お姉上樣がお嫁に行つたら、お父樣と二人きりなんですねへ、困つたね

へ、淋しくなつて……、」

「義夫さん……妾、妾、お嫁になんぞに行かない……如何しても行かないわ、義夫さんとお父上樣と三人で、お兄上樣の歸つて來つしやるのを待つてゐたいわ……。」

「だつて、お父樣が怒るんでせう。」

「……。」

吉野は太い溜息を吐いて、それには返事をしなかつた「あゝ如何したら宜いんでせう。」と、力なく入口の障子を締め、義夫の手を取つて座敷へ歸つた、義夫は突然、

「ねへお姉様、大谷さんに頼んで、お父上様に言つてもらふと好いや。」と、さも妙案を思ひ付いたやうに言ふ。

「其麼、其麼ことは出來なくつてよ。」

「何故？、大谷さんに言っちや不可ないの。」

「不可なくはないけれど、駄目よ。」と、吉野は益々思案に暮れて「人間てものは、嫌やな者だわねへ……、」と、止めどなく湧き來る涙を、怺へる力さへなかつた。

「だつて、大谷さんは、お姉上様の事を隨分心配してゐるんですよ。」

「まあ、義夫さんは……、」

「本統よ、何日でも、お姉様の事を、能く聞くんですもの、身體は惡くなりやしないかつて、今日だつて言ひましたよ。」と、義夫は熱心に「あ、僕、まだお姉様に言はなかつたけれど、お兄上様は達者だから、心配するなつて言ひましたよ。」

「お兄上様は達者ですつて……、」

「エ、、だから心配しちやいけないつて。」

「御親切な方だわねへ……、」と、吉野は深い思ひに沈んで、何者にか憧憬るやうに、あらぬ方を涙の眼で瞶めてゐたが「何故世の中は斯うなんでせう、如何しても思ふやうにならないのなら、死んだ方が增しだわねへ。」

熱い涙がバラ／＼と落ちた、義夫は妙な物でも見たやうに、目を丸くして顔を瞶めるのであつた。

（二十三）

翌朝義夫を送り出して、まづ朝の忙しさが終つたと思つてゐる所へ、姿勢よく久四郎が俥を飛ばして來た。

「如何したのぢや、何か急用でも出來たのか。」と、義興は不審さうに言つたが何所となく活氣付いて、家の中まで昨日とは變つて、陰鬱な空氣が消え去つたやうに思はれた。

「はい、昨晩、あれから又後藤樣へ參りまして、種々と御相談して參りましたが、先樣では、一度お嬢さまにもお知己になつて置きたいからと申されまして今日西洋軒へお出でを願ひたいと申されますので、此方樣の御都合は如何かと存じまして……はい。」と、久四郎は立て續けに、油の乘つた口調で言つた。

「然うか、それや御苦勞ぢやつた。」

「御都合は如何なもので……」

「あゝ無論差支はない。」

「お出で下さいまするか、左樣なれば、私はこれからまだ色々と準備もございますので、これで失禮いたします。」

久四郎は慌てゝ立ちかけた。

「一髄何時頃行けば好いのぢや。」

「はい。」それは又、自動車でゞもお迎ひに參りまするで……、」と、久四郎は急いで立ち歸つた。

最う此家へ佗住居をしてから、餘程月日は經つが、未だ曾て俥を乘り捨てゝ來た客はなかつた、俄かに金が這入つた譯でもないのに、何となく心忙しくつて、義興は落着いてゐられない位であつた。

「吉野、これから西洋軒へ行くのぢやから、着物を出して、好く準備をして置かないと不可んぞ。」

「はい。」

吉野は嫌やで〳〵、逃げられゝば逃げたい位に思つてゐたけれど、父に對しては一言も返す女ではなかつた。

「お化粧もして、早くしなさい……、」

「はい。」と、力なく組末ながらも晴着を一重ね出した、そして、襦袢だの羽織の紐だのを、探し出すのを見守つて氣早やな義興は、悟しさうに煙草を燻してゐた。

丁度午前十一時一寸前であつた、自動車の勇ましい爆聲が、姉川家の表で止つて、亦久四郎が訪ねた、此邊の問題にされてゐた姉川家へ、俄かに俥だの自